

松井名誉会長追悼特集

はじめに

日本白鳥の会・松井繁名誉会長が、2004年9月26日に逝去されました。

松井名誉会長は、日本白鳥の会の設立に尽力され、その後長らく会長を勤め、海外の学術調査・研修会を企画・実施するなど、会の発展に尽くされました。このほかにも、Wetlands Internationalの日本国代表および日本委員会会長も勤め、水鳥類とその生息環境の保全に大きな貢献をされてきました。また、野生動物の写真家としても数冊の写真集を出版されており、本業の医師以外でもいろいろの面で活躍されてきました。このように、日本白鳥の会の創設・発展に大きな貢献をされた故・松井繁名誉会長を偲び、本会会誌「日本の白鳥」29号を追悼特集とすることにしました。本会会員をはじめ、生前に松井名誉会長と親交のあった会員外の方々にもお願いし、先生の思い出などを書いていただきました。

お寄せいただいた文は、いずれも松井名誉会長について述べていますが、それぞれの内容は多少重複することはあっても多岐にわたり、松井名誉会長の活動の幅広さ、また器の大きさを反映していると思います。

この特集のため、投稿していただいた方々にお礼申し上げます

日本白鳥会会長 藤巻裕蔵

松井名誉会長・略歴

- 1924年 北海道名寄市に生まれる
- 1949年 北海道大学医専卒業
- 1950年 北海道大学医学部整形外科教室入局
- 1955年 釧路市太平洋炭鉱病院整形外科医長
- 1958年 網走市で整形外科医院を開業
白鳥の撮影を精力的に行う
- 1964年 札幌市で桑園中央病院を開業
ニッコールコンテスト第二部推薦を受賞
- 1966年 東京富士フォトサロンで「オホーツクの白鳥」展
- 1972年 東京ニコンサロンで「日本の白鳥」展
- 1973年 日本白鳥の会をハクチョウの保護・研究者とともに設立
- 1975年 写真集「日本の白鳥」(善隣。東京) 発刊
- 1977年 IWRB(国際水禽調査局、現Wetlands International(国際湿地保全連合))
日本委員会を設立
写真集「日本の白鳥(普及版)」(善隣。東京) 発刊
- 1979年 日本のラムサール条約加盟に貢献(日本がラムサール条約締約国へ加盟)
- 1981年 IWRB日本委員会会長、日本白鳥の会会長
「雪国のハクチョウ」(岩崎書店、東京) 発刊
- 1984年 「ナキウサギの谷」(岩崎書店、東京) 発刊
- 1985年 日本鳥類保護連盟総裁賞を受賞、IWRB日本国代表
- 1995年 IWRBがWetlands Internationalと改名したのに伴い、その日本国代表および日本委員会会長
- 1997年 写真集「白い恋人たち、シベリアからの使者」(北海道新聞社、札幌) 発刊
- 1998年 日本白鳥の会名誉会長
- 1999年 クッチャロ湖水鳥観察館名誉館長

松井繁名誉会長を悼む

辻井達一

日本国際湿地保全連合会長

日本国際湿地保全連合は、名誉会長・松井繁博士を失いました。松井博士は「白鳥の先生」として有名でしたが、博士と私とのご縁もまた、白鳥を通じてのものでした。

ラムサール条約登録湿地の一つ、北海道苫小牧にあるウトナイ湖は世界でももっとも頻繁な航空路の直下にある湖ですが、ここはまた、もっとも多くの白鳥のフライウェイでもあります。

ウトナイ湖のすぐそばに、その名も白鳥湖と呼ばれる小さな湖があって、松井博士はここにスワン・ミュージアムの建設を企画されました。そのプランはこれまた奇しくも私の年来の友人であった熊谷直勝教授（故人・北海道教育大学教授・デザイン学）がデザインしたこともあって、ご相談を受けたのが始まりで、以来、長くご厚誼を受けました。

スワン・ミュージアムは遂に日の目を見ませんでした。今のウトナイ湖野生生物センターは、いわばそれが具現化したものと言えるでしょう。

さて、日本国際湿地保全連合の発端は、1977年（昭和52年）の国際水禽調査局日本委員会（IWRB-J）に遡ります。創立間もなく1980年（昭和55年）2月に、IWRB第26回各国代表者会議が札幌で開かれましたが、松井博士はこの札幌会議開催に大きく貢献されました。その年の6月には、日本政府がIWRBに加盟、釧路湿原のラムサール湿地登録の運びとなったのです。

1985年（昭和60年）に、創立当初からの山階会長が辞され、松井博士がその後任として会長となりました。

1989年（平成1年）委員会の名を国際水禽湿地調査局日本委員会（IWRB-Japan committee）としました。「水禽」に「湿地」が加わったわけです。同年「日本湿地目録」が出版されています。

1993年（平成5年）釧路市でラムサール条約第5回締約国会議が開かれ、IWRB-Jは発表を、また、これを期に釧路国際ウェットランドセンター（KIWC）の設立に大きく力を注ぎました。

引き続いて1994年には同じく釧路市で「東アジア～オーストラリア湿地・水鳥ワークショップ」を環境庁、オーストラリア自然保護庁、AWBなどと共催し、国際的ネットワーク作りに貢献しています。

翌1995年10月には「湿地と開発に関する国際会議」をAWB、ウェットランド・フォー・アメリカと共催しました。

1996年（平成8年）3月にブリスベンで開催のラムサール条約第6回締約国会議の開催に協力、ここでは本会がAWBと協力して作成した「アジア太平洋地域における湿

地・渡り性水鳥保全戦略1996-2000」の実行が本会議の勧告1・4「ブリスベーン・イニシアティブ」の中で謳われました。

1997年（平成9年）3月、「水鳥重要生息地国際フォーラム」を東京で開催、また「ガン・カモ類保護ネットワークの構築事業」を行いました。4月、IWRBの国際湿地保全連合への改組に伴って、国際湿地保全連合日本委員会（WI-J）となりました。

1999年（平成11年）重要湿地選定調査事業が開始され、これは「日本の重要湿地500」として実を結ぶこととなりますが、事業途中、2000年（平成12年）8月に会長職を辞されました。

このようにIWRB-JからWI-Jまで、およそ15年間にわたって、そしてWI-J名誉会長としての5年間を加えれば20年の長きにわたって日本の、そして世界の水鳥と湿地の保護に力を尽くされ、心を傾けて来られたこととなります。

「魂は白鳥と化して天空に上った」というストーリーが幾つかあります。松井名誉会長もまた、このストーリーを想起するのに相応しいものと思えるのです。

サンクチュアリの陰の立て役者、松井先生の思い出

安西英明

(財)日本野鳥の会・主任研究員

1981年の3月、白く凍っていたウトナイ湖に青い湖面が顔を覗かせ、ハクチョウたちが北帰のため集結を始めた頃だった。当時ウトナイ湖の西に建っていたホテルの屋上は松井先生とはじめて出会った場所だったように思う。

ウトナイ湖サンクチュアリの開設はその年の5月で、私が(財)日本野鳥の会の初代レンジャーとしてネイチャーセンターに住み込みを始めたのが4月末だから、その前ということになる。スプリングキャンプと称して、全国からはせ参じたボランティアとともにサンクチュアリ開設の準備の最中だったはずで、私はその開設準備を抜け出してウトナイ湖全体を見渡せるホテルの屋上で水鳥の数を数えていたのではなかったか。覚えているのは、私の後からホテルの屋上に上がってきたオジサンが、コハクチョウの群れが舞うたびに「ウォー」だったか「ワー」だったか、とにかく感嘆の声をあげるのである。実は、そのオジサンがかの松井繁だったことは後で知ったのだった。

いろいろな機会にウトナイ湖サンクチュアリ開設前後の松井先生のご尽力は紹介されていると思うが、お人柄とともに政治力を備えられていた松井先生ならではの、水面下でのご尽力も大きかったことだけはここに記しておきたい。三脚や倉庫や布団などさまざまなものをサンクチュアリに寄贈されたことは記録されているだろう。しかし、ハクチョウやウトナイ湖の保護、サンクチュアリ設置で行政への働きかけなどの目に見えない、歴史には残らない部分で、松井先生が先駆的かつ大きな貢献をされていることを知る人は今や少ないと思われるからだ。

私が最初に松井先生のすごさを知ったのは、病院だった。ウトナイ湖サンクチュアリ開設時、レンジャー1人体制で疲労の極地にあった私は、一度松井先生の病院に入れられたことがある。当時の野鳥の会執行部が手を回したのか、松井先生が気を回したのか定かではないのだが、病院の相部屋で隣になったのは「その筋の方」だった。

野鳥保護の表舞台で顔が売れてしまっていた私は、よくからかわれた。ある時、蒲団屋のトラックが病院の横に駐車したのを病室から見つけた彼は、「アンチャンよお、オメーは鳥を守るのが仕事だろ。蒲団屋は鳥の羽をむしる敵じゃねえのか。やっつけなくていいのかよ」そんな具合だった。そんな怖いお兄さんも、松井先生の回診時には変身し、猫撫で声で「先生様、いつ退院させてもらえますか」となるのであった。白鳥の写真や保護や、さらにナキウサギにも情熱を注がれていた先生の本業、お医者さんという仕事だけでもすごいものだと思わされた。

松井先生にススキノの飲み屋に連れて行かれたこともあったが、笑顔で飲んでおられても、病院から電話を受けたとたん、さっとしらふにもどられるのを目の当たりに

して、ますます畏敬の念をいただいたものだ。

松井先生の情熱は、時にお怒りに変わることもあった。下品で申し訳ないが、当時のウトナイ湖サンクチュアリの仲間の中で「けつの穴オジサン」と呼ばれていた。先生がお怒りモードになる前、その兆候として「誰だ、そんなけつの穴の小さいことを言うやつは」となるからだった。私も何回か怒られたように思うが、今ではそれが何のためだったか思い出せない。ただ、ウトナイ湖から札幌まで出向く度に、奥様とともに迎え下さった優しい笑顔は忘れることがないだろう。

「自らを誇らず」

小川 巖

エコ・ネットワーク代表

松井先生とお付き合い頂いた期間は30年余り。それが長かったのか短かったのか。ひとつだけ言えるのは、公私にわたり大変お世話になったことだ。書き残しておくべき話題は沢山あるのだが、ここではふたつのエピソードを取り上げるにとどめ、そこから先生の人となりを感じとって頂けたらと思う。

松井先生に初めてお目にかかったのは、昭和59年秋だったはずである。北大の大学院に在籍していた私はモズとアカモズの種間関係を研究テーマに、フィールド調査に明け暮れていた。両種ともに夏鳥として春になると北海道に渡来する。ある地域で両種が同じ環境を巡って競争的な関係になる。その関係こそ私のメインテーマであるの言うまでもない。研究も後半に入ると、直接的な競争というよりは、むしろ共存的な関係が見えてきたような気がした。そうなる、非繁殖期の生活も両種の生態を考える上で重要になってきた。モズは本州で越冬しているので、取り組みやすい。実際私は昭和47年冬から静岡県磐田市をフィールドにモズの冬期調査に入っていた。そうなる、残るはアカモズの越冬地だけである。文献によると、アカモズはマレー半島、インドネシア等で越冬している、とある。ある時行く決心を決めた。今のように格安航空券がある時代ではない。数ヶ月の滞在になるといろいろ面倒な手続き、準備が待ち受けていた。面倒な準備のひとつにマラリア対策があった。その相談を竹田津実さんに持ちかけたら、いとも簡単に

「ああ、それなら松井先生のところへ行けばよい」

と事もなげに仰る。先生のお名前はそれ以前にも伺っていたものの、それまで接点があった訳ではなく、もちろん面識もなかった。

「そうは言っても、全然会ったこともない人ですし」

とやや腰の引けたようなことを言ったはずである。何しろ30年以上も前の出来事だ。詳しいやり取りは覚えていない。次の記憶は、私が先代の桑園中央病院を訪ねた所まで飛んでいる。恐らく竹田津さんが連絡をしてくれたのだらう。

忙しい診療の合間に初対面の私に快く会って下さった。これからお世話になるのだからと、ウィスキーを1本携えていったように思う。その時にどんな話をしたのかまでは覚えていない。しかし、それまで怪我や病気で職業的に医者と接した経験はいくらでもあったものの、個人的に医者と接するのは初めてで、しかもこんな気さくに初対面の男に話をしてくれる先生がいよいよとは、とむしろ驚きの方が大きかった。帰りがけ

「道路の向かいの住宅に寄ってらっしゃい」

と言われ、臆面もなく目と鼻の先にある先生のご自宅に顔を出した。何とそこでお数を数本頂くことになった。嬉しいやら面映ゆいやら。酒1本でその数倍以上をザックの中にマラリアの薬と一緒に詰め込み、更に一升瓶を両脇に抱え研究室までは天に昇る気持ちで急いだ。20年くらい経ってから先生にその時の話をしたことがある。

「そうだったかなあ」

と言うばかりで、本当に覚えていないようであった。

もうひとつのエピソード。10年前になるはずだ。札幌駅北口のキャノンサロンで先生の写真展が開かれた。道新から出版された写真集を記念した写真展だった。数十点のパネルは白鳥のやさしげな姿を写したものが多い。先生の前ではハクチョウが嬉しげに演技をしているかのようだ。そういった写真の中に異色なのが隅の方に1点あった。A4サイズ位でしかも白黒である。

よく見ると雪原の中に白鳥が小さくポツンと写っているだけ。気になっただけに、後日開かれた懇親会の席であの写真についてお聞きしてみた。

「ボクが白鳥の写真を撮り始めた頃は、なかなか白鳥が近くに寄ってくれなくて、匍匐前進をしながらようやく撮ったのがあれだった」

今や白鳥が人前に現われるのは普通の光景である。わずか30～40年前の白鳥があんなに遠い存在だったとは。あの1枚の写真は白鳥と人間の関係を何よりも如実に物語っている。それをさりげなく地味に掲げ、そっとアピールする先生の白鳥に対する心情を感じない訳にいかなかった。その時改めて感じたのは「自らを誇らず」という一貫した姿勢である。

この姿勢こそ先生から正しく受け継いでいきたいと私は密かに思った。

私の松井繁名誉会長の思い出 ～1999年「日本白鳥の会・米子水鳥公園合同研修会」～

神谷 要

(財)中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

私の松井名誉会長の思い出は、実は殆どありません。実際にお会いできたのは、1999年1月30日に鳥取県米子市米子コンベンションセンターで行った「第23回日本白鳥の会・米子水鳥公園合同研修会」の一度きりだったと思います。私は、まだ就職4年目で、初めての全国規模の大会の運営に色々と戸惑っているときのことでした。

日本白鳥の会は、この2ヶ月前の総会で松井会長が名誉会長に退き、現藤巻裕蔵会長の体制に移行しました。そのようなわけで、この研修会に先立ち、会長交代の挨拶をして頂いたのを覚えています。私が、白鳥の会をお手伝いするようになったのもこの時からで、当時の松井先生は、会う人、会う人に「白鳥の会を盛り立て下さい。」とお願いされているのがとても印象的でした。

私の手元には、当時の米子での研修会の発表者リストが残っています。

◎特別講演

藤巻裕蔵(日本白鳥の会会長):ロシア・レナ川中流域でのハクチョウ類生息状況調査

◎ 研究発表

仁科久雄(湖北野鳥の会):滋賀県湖北町に飛来するハクチョウ類

小西敢(クッチャロ湖水鳥観察館):クッチャロ湖における白鳥の飛来数について

菊地昶史(日本白鳥の会):白鳥の会ハクチョウ類観察記録とりまとめについて
目次俊夫(山陰ビデオシステム):ロシア・コリマ低地でのハクチョウ調査
脇坂英弥(ホシザキグリーン財団):出雲平野におけるコハクチョウの生息状況
山本良征(日本野鳥の会鳥取県支部):中海のハクチョウ
神谷要(米子水鳥公園):中海で行われた首輪標識

図2. 研修会で筆者に質問する松井繁氏.

参加者は45名でしたが、当時の私にとってはいろいろな意味で大変勉強になった会でした。松井先生は、私のコハクチョウの渡りに関する発表について、「白鳥が、日本海を渡るとは面白い。昔、そんな事をしきりに言っていた人がいた。彼も喜んでい
るだろう。」とコメントを頂きました。

また、米子水鳥公園の施設を見て、「鳥を観察するためにこんな施設ができる時代になったのだね。」と感慨深げに語られていました。

図3. 第23回日本白鳥の会研修会、米子大会の集合写真

その後、先生の体調が悪いとはお聞きしていましたが、クッチャロ湖での東アジアガンカモネットワーク第一回会合(1999年11月)は1日違いですれ違いになってしまったほか、2003年5月の同じくクッチャロ湖の白鳥の会の研修会には私が参加できず、すれ違いのままとなってしまいました。

ぜひ、「日本白鳥の会」創生期のころのお話や、「国際湿地連合日本委員会」の創設の話、日本のラムサール条約加盟の話などいろいろお尋ねしたいと考えておりましたのでとても残念です。

松井先生の御冥福をお祈りするとともに、先生の湿地保全にかけた情熱を少しでもひきつぐことができたらいと考えております。

2004年晩秋 中海の水鳥たちと共に…

松井繁先生に出会えて

小西 敢

098-5792 浜頓別町日の出 浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館

平成7年にオープンした浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館へ、卒業後直ぐに勤務することになり、最初の大きな仕事は、浜頓別町で開催されたラムサール条約国内登録湿地関係市町村会議だったと思います。3年に一度、ラムサール条約締約国会議の1年前に国内のラムサール条約登録湿地の市町村長が一同に会して、登録地の現状や問題点、解決策など話し合うもので、各地域持ち回りで行なわれている会議です。文字通り右も左もわからない状況の中、スタッフの一人として、携わりました。この時、基調講演を行なって頂いたのが、当時、日本白鳥の会の会長だった松井繁先生でした。松井先生との初めての出会いでした。まだ、白鳥観察に日が浅い私にとって、初めてお聞きする事ばかりで、たいへん興味深かったのを覚えています。私の師匠である、山内昇さんの大親友であり、先輩として尊敬している方だとお聞きし、滞在期間中のお世話をさせて頂きました。短い滞在期間中にも、白鳥の事をいろいろ教えていただきました。

次に先生にお会いしたのは、平成8年に浜頓別町で行なわれた日本白鳥の会研修会の時だったと思います。浜頓別町に念願の温泉が湧き、新しい宿泊施設が完成しました。その第1番目の利用者として日本白鳥の会の方々に使ってもらおうと、山内さんと松井先生が企画したとお聞きしました。総勢40名を超える参加者で、大盛況の中、各会員の方々との交流ができました。私は山内さんの弟子として、初めて会員のみなさんに紹介いただきました。日本白鳥の会の研修会によって、全国にこんなにも白鳥の事を大切に思っている人たちがいると実感しました。クッチャロ湖の白鳥を見られた事と会員同士が元気に集った事もあり、みなさん笑顔でした。この事がたいへん印象的で、松井先生を筆頭に気持ちのやさしい方々が集っている会だと思いました。ただ、この時はまだ、私がこの会の事務局を仰せつかうとは夢にも思いませんでした。

それは先生からの突然のお話でした。松井先生が会長を降りるとの事にも驚きましたが、事務局をしてもらえないかとのお話に二度、驚きました。まだ、白鳥を観察して3年にも満たない私が全国の白鳥に精通した方々のお役に立てる事などあるのかと、しばらく悩みましたが、山内さんが事務局長という立場となるとお聞きし、また、米子の神谷さんも事務局として協力いただく話もあり、少し気が楽になりました。そして、良い経験になるかと思いつつも事務局をさせて頂く事としました。平成10年の総会の席で、松井先生が隣にお座りになって「心配しなくてもいいから、頼むね」と耳打ちされたのを今でも覚えています。

その後、事務局として、各地域の研修会に参加することになりましたが、松井先生からの事務局のお話がなければ、こうして各地を訪れる事もなかったかと思います。

また、白鳥に携わる人にとっては、憧れの地であるロシアのレナ川でのオオハクチョウ調査へも参加させていただく機会を作って頂きました。このような貴重な経験をさせていただいたのも松井先生のお力添えによるものでした。

平成11年にクッチャロ湖のラムサール条約指定10周年記念式典を開催する事になりました。松井先生のご協力により東アジア地域ガンガモ類重要生息地ネットワークのワークショップを同時開催する事ができました。浜頓別町では初めての国際的な会議となり、国内外から、ガンカモ類の研究者がクッチャロ湖に集いました。この式典の際に環境省西北海道地区自然保護事務所長より、水鳥観察館の名誉館長として、松井先生が任命されました。それ以来、毎年、秋の白鳥初飛来を松井先生へご連絡するのが私の楽しみの一つとなりました。

お忙しい病院の勤務のなか、白鳥の撮影に訪れ、山内さんの家で、各地の白鳥の話や夜が更けるまでお聞き出来たのも思い出に残っています。まだ、若輩の者の私に対しても、とても親切に接して頂きました。私の結婚や長女が誕生した際にご連絡をすると奥様と一緒にたいへん喜んでいただきました。クッチャロ湖へお越し頂きお会いするに当たって、いつの間にか、山内さんが私を呼んでいるように「かんちゃん」と先生から呼ばれるようになったのも親しみを持って接していただく先生の人柄によるものかと思えます。

私は白鳥に携わってまだ10年と短いものの、松井先生と出会えた事によっていろいろな経験をさせて頂きました。松井先生を紹介して下さった山内さんに感謝すると同時に松井先生と共に白鳥を観察する時間が持てた事をたいへん光栄に思います。今はただ、生前のご功績を偲び心よりご冥福をお祈りいたします。

アメリカコハクチョウと松井先生

谷岡 隆

056-0006 静内郡静内町中野町2丁目6番38号

電話口から「はあ〜い、松井です」とあの上品で独特な声が、今でも聞こえて来るような気がする。私の場合、野鳥との本格的な出会いがアメリカコハクチョウで、そして松井先生と切り離すことは出来ない。

しかし、昨年、松井先生がお亡くなりになった葬儀会場でも思い巡らせてみたが、最初の出会いが不明瞭で私が先生に電話をしたのか。それとも新聞報道等を見て先生が私にコンタクトをとってくれたのか、その時期と場所を性格には思い出すことが出来ないが、恐らくアメリカコハクチョウ越冬の二シーズン目だと思う。

国内で越冬するのは僅かに数羽という希少種であるアメリカコハクチョウが、昭和62年11月6日、突然、静内町の静内川に姿を見せ、翌年の昭和63年4月9日まで146日間、静内川、浦河町・日高幌別川、様似町・様似川を往来する形で越冬した。

オオハクチョウしか越冬せず、コハクチョウの中継地にもなっていない北海道日高地方でなぜ、コハクチョウの亜種であるアメリカコハクチョウが越冬するのだろうか。という疑問は解けてはいないが、今考えても不思議なことだと思っている。

当時、野鳥が好きで写真を撮ることに没頭していた私にとってそれは大きな出来事との遭遇であった。理由はこれが起因して、現在のマガン観察へとつながって行ったからである。

やがて松井先生がアメリカコハクチョウ越冬を何かで知り、昭和63年2月7日、最初の越冬地である浦河町と様似町を訪れ、アメリカコハクチョウを発見した様似町の金子寛康さんと餌付けをしていた馬場幸子さんに会いに行っている。

その時の報道で松井先生は「コハクチョウが紋別地方〜苫小牧地方以東の河川や湖で確認されたのは初めてで、道北から日本海側の道央を通る確認済みコース以外に、道東の湖沼を経由した渡りのコースの存在を証明する初めてのデータになる。また、道内ではコムケ湖で数回確認されただけで、越冬すれば初めての記録となる」と感想を述べているが、同時に「道内初観察とも言えるアメリカコハクチョウがここで確認できたのは、金子さんの注意力のほか、馬場さんの日常の努力のおかげ」といかにも松井先生らし心遣いと言葉が印象深い。

結局、翌年の2シーズン目以降、アメリカコハクチョウが越冬の基点を静内川としたため、私も観察するべく静内川へと通い、松井先生とも出会えることとなる。

思い出すのは、アメリカコハクチョウが約四千キロも離れたベーリング海のチュコト半島付近からやって来ること。希少種であり、国内でも定期的に越冬するのは岩手県北上川だけであることなどを熱っぽく語ってくれたことで、ほかにも観察ポイントなどを教えてもらった。また、写真を撮っては松井先生に送り、その都度、必ず「ど

うも有り難う…」と電話やハガキを頂いたが、その喜んでいただく声を聞きたくてアメリカコハクチョウに会いに行つたと言っても過言ではない。

また、ある日曜日、家でゴロンとしていると、家内が「お父さん、松井先生だよ」と言うので外に出ると、運転手さん付、紺色ベンツから松井先生が降りてきて、「アメコを見たくなくなったので静内町まで来ました」と突然、我が家へ来訪。びっくりもしたが、何十軒もある役場官舎をどのようにして調べ、我が家まで来たのか不思議であったと共に、このような出来事が沢山あり先生の人柄に心酔していったことと合わせ懐かしい思い出である。

そして、もう一つ、平成5年、翌年の現地研修会開催地が諸事情で難航していたおり、松井先生から来年は是非、静内町でと依頼され、今日とは違い町マイクロバスの運行が容易な状況下であった時代でもあり、苫小牧市と静内町間の交通アクセスの悪さを町のマイクロバスで補い、平成6年2月19～20日、静内町で「第18回日本白鳥の会現地研修会」を開催、白鳥の会というより松井先生のお役に立てたことが、私にとって一番の思い出となっている。

しかし、平成7年、地球温暖化現象に起因、何の前触れもなく突然にマガンが静内町で越冬を開始、以後、毎日の観察が必須となり、一人ではマガンとハクチョウの双方を同時に観察する余裕もなくなり、平成10年、アメリカコハクチョウ越冬が終了したことも重なり、ハクチョウとの縁が段々と希薄となっていき、松井先生ともお会いする機会も少なくなっていっことは申し訳ないと思っている。

でも、私にとって先生はいつも心の中におり、平成10年、ハクチョウの写真集「白い恋人たち」出版記念パーティーでもお目にかかれたし、現地研修会も平成8年・クツチャロ湖、平成15年・クツチャロ湖、平成16年・水戸市、平成17年・豊科町と最近は出席しているが、一昨年クツチャロ湖での再会が松井先生とは最後となってしまった。

平成3年2月、一週間一人で旅をし、宮城県・伊豆沼では笠原さん。新潟県・瓢湖では吉川さん。福井県・三方五湖では辻さん。鳥取県・中海では安田さんと、日本を代表するハクチョウ越冬地を訪れ、地元で活躍する愛鳥家と交流を深めることが出来たのも、先生のハクチョウに対する深い愛情と情熱を拝見し、自分も何かをしなければと触発されたのがきっかけであり貴重な経験となった。

11年にわたるアメリカコハクチョウとの付き合いはハクチョウ、野鳥観察の原点となり、観察を通じ、言葉を交わすことができないのに時折、お互いの意志が通じたかのような不思議体験も何度か経験させて頂いた。私にとってアメリカコハクチョウとの出会いはイコール松井先生であるが、そのアメリカコハクチョウと引き合わせてくれたのは松井先生であると今でも私はそう信じている。

松井先生、有り難うございました。

白鳥を愛された慈父の人

—松井先生の思い出—

西成辰雄

019-0504 十文字町十文字新田字東町1

松井繁先生にお目にかかったのは1990年2月、当町での日本白鳥の会の主催する研修会に会長として、また講師としてお出でになられた時である。遠路、ご多用の中をお出でくださったと思う。その折、先生から御著「雪国のハクチョウ」をご恵与いただいた。全国での研修会としては15回目であった。カラー版の見事な先生の撮られた数々の白鳥の姿、そしてご解説と、貴重なご本として大事にさせていただいた。私たちの町は秋田県南部地方にあり、雄物川の支流である皆瀬川が町の西部を流れ、その岸边近く、やや蛇行するゆるやかな流れに冬を過ごす白鳥が例年1月頃を中心に900羽ほどが秋から飛来し羽を休めている。

先生のご本には観察された白鳥の姿と共にその種類や生態、また繁殖地などを含め、きめ細かにわかり易く解説されており、白鳥への思いを新たにされた。先生は豊富なスライドを用い、その優雅な姿と様々な行動、また飛来する経路を含め興味深い有益なものであった。またこの研修会では松井先生を始めとしていく人かの方々の研究発表もなされ、得る所の多いものであった。当時、秋田県には3500羽ほどの白鳥が飛来し、その過半数は当町の皆瀬川で過ごしていたが、近隣の川や沼に移動している。ちなみにカモ類は最近の集計で同じ皆瀬川で2900羽ほどとなっている。

松井先生のご本では知床に近い野付湾には5000羽以上の白鳥が飛来し世界一の越冬地とのべられていた。また野付湾での日の出のお写真は見事な絶景とも言うべきものであった。また飛翔への水面での助走や躍動的な羽ばたき、そして着水、家族、親子など、その思いがこめられた美しい写真であった。自然の中で心を共有され、愛情に満ちた内容であった。先生はお忙しい中にもその記録を通じて、自然保護を訴え実践された方でもあった。釧路湿原など国際湿原保護条約（ラムーサール条約）についても解説されている。私も陸奥湾や山形県酒田市の最上川河口まで新潟県の瓢湖などにも訪れているが、先生の出会い、ご教示はその原点ともなるものであった。

当町の皆瀬川は、宮城、岩手県にもまたがる栗駒山系から流れ、清明な中に、朝の日差しが川面の色調を刻々と変化させ、また対岸には日没に近く西に望む鳥海山（標高2230m）があり、白鳥の群れと共に夕陽が映える。対岸ともなる南部に隣接する湯沢市に写真家であり、もと建設省の職員もされた最上緑平氏は数々の鳥類の観察や記録の写真「自然のメッセージ」なども刊行されているが、この白鳥飛来地での出会いのあと、度々お会いさせていただいており、最近（2年ほど前）に氏の原作の「白鳥の詩・志摩の恋人」が地元の音楽家によって作曲され、地元のコーラスや声楽家、またピアノを始め各種の演奏に合わせ。約2時間の「映像音楽詩。鳥夢想オンステージ」

として上演され感銘を呼んだ。氏は白鳥がロシア・シベリアの地から飛来していることから縁を得て北極圏に望むノボシビルスク市の音楽院を訪ね、交流やこの音楽詩の上演も企画している。秋田市での上演も具体化しているが、将来現地（同市）での公演も具体化される見通しとなっている。

自然への愛情と共生、松井先生のご活躍に敬意を表しながら、その後のこれら最近の当地で状況も合わせてご報告し、白鳥そして自然を愛された慈父の人ともいふべき松井先生に表敬を感謝の一端をのべさせていただく。（前十文字町長）

松井名誉会長の思い出

芳賀孝行

060-0008 札幌市中央区北8条西25丁目1-10

私にとって、松井先生は日本白鳥の会の松井さんというより、事業主としての松井先生の方が印象深いものがあります。

私が松井先生と初めてお会いしたのは1962年4月でした。当時松井先生は網走市内で整形外科医を開業していて、事務員募集のおりに中学卒業したての私が応募し面接を受けたのが最初でした。

私は身長が低いため、与えられた白衣がくるぶし近くまであり、そのことは松井先生に事あるごとに言われて笑われたものでした。その頃の松井先生も若く、医師としての日常を精力的に送っていました。同時にハクチョウのシーズンには、診療時間前後に涛沸湖でハクチョウの写真を、蜃気楼の時期には蜃気楼が出たよと連絡が入ると、患者さんを待たせて写真をよく撮りに行っていました。

医院の2階が松井先生の住宅及び看護師さんの寮でした。看護師さんは二十歳前後の人が多く、私生活や仕事のことで応接室に呼ばれ叱られていましたが、私には、芳賀君は男だから叱るわけにはいかないと言われ、殆ど叱られた記憶がないこと、私が在職中最後まで仕事上のことでもよく私の話を聞いていただき、松井先生の下で仕事ができ楽しかったです。

私が松井整形外科医院に入って2年半後に札幌市内で病院を開設した時も、私は松井先生と行動をともにし、札幌へ転居しました。札幌で開業して数年後から、松井先生は精力的に全国のハクチョウ飛来地を訪れ、その土地でハクチョウの保護に当たっていた人の話を聞いたり、写真を撮ったりするようになりました。そして多くのハクチョウを保護されていた方々と日本白鳥の会を設立しました。日本各地で撮影したハクチョウの写真は、パネルにしてハクチョウたちのために使うお金にするからと、病院内で写真のオークションをしていました。

私が松井先生の私的なことをお手伝いするようになったのは、IWRBの大会を札幌で開催する直前の頃からです。最初はIWRB札幌会議の資料作りでした。その後日本白鳥の会総会や現地研修会と一緒にいくようになりました。松井先生は、これは自分の私的なことだからと私にかかる費用は全額松井先生が出してくださいました。病院の仕事と日本白鳥の会の事務的なことを同時に行うことで忙しい思いもしました。そのお陰で、日本白鳥の会の多くの人と出会い、ハクチョウの多くの飛来地にも連れて行っていただきました。

新潟の家田三郎先生が会長を辞して、松井先生が会長に選任された頃から本格的に

日本白鳥の会の仕事をするようになりました。東京都の日本青年館での総会に初めて出席し、研修会は宮城県の伊豆沼が最初で、事務の上で覚えていた名前の多くの方々と初めてお会いしました。この名前の方はこういう人だったのか、少しずつ名前と顔が一致するようになりました。

研修会も北は稚内の大沼、浜頓別のクッチャロ湖、南は滋賀県の琵琶湖まで行かせてもらいました。その土地その土地で歓待を受け、おいしいお酒を飲ませていただきました。

総会や研修会で松井先生が会員の方から用事を受けると、ほとんど芳賀にも話してください、私は忘れっぽいから、芳賀に話していれば必ず私に話が通じますからと、そのお陰で私はほとんど松井先生につきっきりのことが多かったように思います。

松井先生が病院の経営を息子さんに譲った後の1998年3月末で私は病院を退職し、松井先生とお別れしましたが、再就職が決まった時、先生とお会いした時も自分のことのように喜んでくれました。病院の退職者の集まりであるOB会で、先生と奥様とは数回お会いしましたが、先生には36年間お世話になりました。もう少し先生と私の新しい仕事のこと、ハクチョウのことなど色々お話ししたかったと後悔しています。

松井先生がお亡くなりになったことは、奥様から連絡をいただきました。先生は心臓のバイパス手術などをして心臓が悪いことは以前より承知していましたが、こんなに早く亡くなるとは思っていませんでした。最初は信じることはできませんでした。最初は信じることはできませんでしたが、先生のお宅の祭壇を見て初めて先生がもうこの世に居ないんだと実感し、祭壇に手を合わせました。

松井先生はこよなくハクチョウを愛していましたので、民話の日本武尊のようにハクチョウに化身して天国へ向かわれたのではと思います。そこでは、先に亡くなられた多くの先輩たちが待っていて、今頃ハクチョウ談議をしているのではと思っています。

松井先生のお陰でハクチョウのことに携わり有意義な時間、多くの仲間と知り合いお話しできたこと、そしてハクチョウ飛来地を巡ることができたことを感謝しています。

松井先生を陰で支えて来た奥様にも大変よくしていただきありがとうございます。最後に、松井先生に巡り会えて本当に良かったと、心から哀悼と感謝を申し上げます。

合掌

故松井前会長様に励まされた思い出

八田知昭

520-1511 高島市新旭町藁園2060

私は、1950(昭和25)年の春、滋賀県庁林務課に就職し、造林事業や治山事業に従事してきましたが、1970(昭和45)年、野生鳥獣の保護と狩猟関係の事務事業を担当することになりました。

その後、国には環境庁が新設され、その指導のもと、地方でも様々な自然環境保全の行政が始められました。例えば、琵琶湖の水質保全のための粉石鹼運動、ごみの投げ捨てノーポイ運動、湖周辺の修景美化等、新しい様々な取り組みが始められました。そのなかで、琵琶湖全域の鳥獣保護区指定計画もその一つでした。

しかしながら、琵琶湖は、古くから関西での著名なカモ撃ち猟場であり、冬季の観光上にも支障ありと、さまざまなご意見があり、指定反対の電報が沢山寄せられる有様で、連日沿岸の関係先や団体等へ、理解と協力を求めて奔走していました。

そんななか、昭和46年の初秋の頃だったと記憶していますが、たまたまマイカーのラジオにて松井前会長様のハクチョウのご講話が連日放送され、大変感動したことが記憶に残っています。そのお話は、保護区の設定業務に大きな力を与えて頂きました。

そして昭和48年に発足されました日本白鳥の会に早速入会させていただき、各地の愛鳥事例や学術的なお話を承るなどのほか、白鳥の会会報にご登載のよき事例が非常に参考になり、有り難いことでした。そして、現地研修会におきましても、いろんな方々からご経験の貴重なと意見等をご教示いただくことができまして、有難いことでした。

また、昭和56年4月には、白鳥の会から滋賀県知事あてに、琵琶湖鳥獣保護区の継続指定に関する陳情書を頂き、同年7月に知事名で引き続き保護区として水鳥の保護を図って行くことを、会長様宛にて回答させていただいたところではありますが、この陳情書は、賛成意見表示の少ないなか、事務関係者一同大変力づけられたものでした。

そして、昭和61年の1月に、第10回現地検討会を琵琶湖の北西部今津町地先(現高島市)で開催させて頂きました時には、不便な所にもかかわらず全国各地からご参加を賜りまして、無事に、そして有意義に過ごさせて頂くことが出来ましたことも、印象に残る所であります。

この検討会は、琵琶湖の鳥獣保護区の設定によって、コハクチョウの飛来数が年々増加し、約200羽となってきた姿を皆様方に見て頂くよい機会でもありました。

いつか松井先生は、琵琶湖の広さから考えてみて、今後の環境保全のあり方次第で、飛来数が5000羽は見込まれるのではと、お話し下さったことがあります。

まだまだその数値に至っておりませんが、現在のところ、湖北野鳥センターと、国の湿地センターが設置されています湖北地方、その対岸に当たる高島市の水鳥観察センターが所在する湖西地方、そして琵琶湖大橋以南の草津市地先の以上3地域が飛来の拠点となっており、各地点ともそれぞれ行政側を地元の方々の大変なご努力、そして愛鳥・自然観察愛好者のご支援のお陰によりまして、優雅な姿が毎年度見られるようになりました。

その後、平成4年7月に、県のヨシ群落保全条例が施行、翌5年には琵琶湖がラムサール条約の指定湿地に登録され、野鳥保護のみならず、環境保全の機運が一層高まってきましたことは、大変喜ばしいことでした。

そんななか、平成13年12月、琵琶湖のほとりでは、2回目となります本会の現地研修会、そして翌日には総会が開催されました。この意義深い会合には、地元の皆さん方が今日までの成果の発表や、さまざまなアトラクションまで企画していただき、全国各地からお集まりいただいた会員の皆さん方に、竹生島をバックにした水鳥の姿とともに、印象深い会合であったこととおもいます。

近年、地球温暖化防止をはじめ、自然環境保全の気運の高まりが、いろいろ見聞されますが、水鳥をはじめ野鳥の存在は、大きな指標とも言えそうです。

白鳥を例に挙げますと、湖北地方では、旧の内湖が復元されたビオトープとその近辺でのコハクチョウの観察ができるようになりました。一方、湖西地方におきましても、湖岸近くの乾田化された圃場の一部に飛来が見られ、農家のご厚意で一部に湛水していただいた結果、平成15年1月から2月まで、約100羽のコハクチョウが定着、夜には琵琶湖へと帰る情景が見られました。同年の秋11月、同じ仲間と思われる姿が同地で観察されました。しかし、農家のご理解も12月には芽が伸び始めた麦作との関係からそこまでで、12月初旬以降、同地域の圃場での姿は見られなくなりました。

幸い、今紹介しました事例の田園と安曇川を隔てて左岸地帯の一部で、農家のご厚意による冬季の水鳥のための本格的な湛水田が設けられ、コハクチョウの姿を見ることができるようになり、有り難いことです。このような環境保全の姿が農家のご理解

で各地に広がって行くことを望みたいものです。

前会長様が、ご研究ご経験されてこられました数々のご業績をもとに、まだまだご指導を賜りたかったことを思うとき、返す返すも残念でありませんが、今日までの温かいご指導、ご鞭撻に心から感謝申し上げますとともに、琵琶湖を中心としました湖国へ5000羽のハクチョウたちの渡来を夢みつつ、ご冥福をお祈り致します。

平成17年初夏

もう少し、もっともっと・・・

服部畦作

005-0002 札幌市南区真駒内柏丘7丁目6番26号、元日本白鳥の会事務局長

松井先生とは、いつ、どこで、どんな機会に、はじめてお目にかかり、お付き合い頂けるようになったのか？二昔以上も前の事ゆえ記憶が定かではないが、多分、昭和40年に札幌市内三菱ビルのロビーで開催された、第1回北海道野生動物写真研究会の会場でではなかったかと思われる。当時、私は北海道立衛生研究所に所属しており、写真には大変興味を持っていた。加えて子供の頃から内田清之助、中西悟堂、仁部富之助氏らによる野鳥の生態観察に関する書籍などを読み漁ったりもしていた。中でも最も私を魅了していたのは、下村兼史氏による鳥類生態写真集であった。超望遠レンズを駆使した撮影された作品の数々は、当時の私にとっては手の届かぬ世界を現実目の前に示してくれたような魅力溢れる著作であった。下村氏は他に文化映画「或る日の干潟」も製作、発表され、それを映画館で見た時の感動は今でも忘れられない。この映画は画期的なものとして評判になり、今日の野生動物映像の魁をもなった名作ともいわれている。

そんな下地のあった私の目に、第1回北海道野生動物写真研究会開催のニュースが飛びこんできた。会場に足を一步踏み入ると、そこには望遠レンズを駆使した鳥獣の写真がズラリと並んでおり、私が書籍の中で堪能した、夢に画いていた数々の写真が現実のものとして目の前に並べられていたのである。松井先生のハクチョウをはじめとして、竹田津氏のキタキツネ、林田恒夫氏のタンチョウ、林大作氏のヤマセミ等々の作品も展示されていたように思う。その他何れの作品もレベルの高い力作ぞろいであった。これぞ私の永年の願いを満たしてくれる集い、と早速その場で入会させて頂いた次第である。そして昭和41年秋の第2回写真展には私自身の作品も展示することができた。この写真展は毎年のように何年も続いたので、会長格でもあった松井先生とは、爾来この会を通じて長いお付き合いを頂けるようになったのである。

そんな中、たしか昭和60年頃のことであったように記憶しているが、松井先生から連絡があり、今度「日本白鳥の会」の会長を引き受けることになった。ついては事務局もこちらに移るので、事務局長を引き受けてくれないかとのお話しであった。私自身その任に堪えられる能力があるとは思えなかったのでご辞退申し上げたが、是非にということでお引き受けする羽目になってしまった。細かい事務的な処理は松井先生の病院におられた芳賀孝行氏がすべてきちんと整理してくださったので、会の運営は万事遺漏なく進めることができた。

松井先生は会長職につかれて以来、精力的に白鳥の会の運営、発展に努力された。そのご努力の様子は事務局長として傍らにいたことが多かった私には手に取るように理解できた。そしてこのことは私の人生修行にとって大きなプラスを齎したのであ

る。“ハクチョウの松井”と言われたとおり、ことハクチョウに関わることについては、常に新しい企画を考え出されていたが、それらの企画は日本国内はいうに及ばず、諸外国にまで及ぶものも含まれていた。そのためには何度か打ち合わせのための会合を開く訳だが、その際末席にいた私が驚かされたのは、打ち合わせ会に集まる顔ぶれが実に多士済々であったことである。それぞれの企画に応じて集められた人材は、何れもその道の専門家といえる人々であって、そういう人々がいとも気楽に呼びかけに応じて会合に参加されたのは、偏に飾らない先生のお人柄と、問題取り組みへの真摯な熱意を誰もが感じたからであろう。

省みれば、松井先生とお付き合いした期間が長かったのか、短かったのか、深かったのか、浅かったのか、今の私の脳裏には思い出ばかりがぎっしりと詰まっており、混沌として整理もつきかねる状況である。何はともあれ、もう少し、もっともっとお付き合いさせて頂きたかったと思う気持ちで一杯である。

合掌

白鳥楽

花積三千人

280-0011 成田市玉造5-33-1

一つの事柄、物、現象、何でもかまいませんが、それに興味を持った人々が、同行の志が集まって会なりグループが出来るのは珍しい事ではありません。同じ楽しさを分かち合い、語り合うのは楽しいひと時であり、刺激ともなります。そして、その会が発展して全国組織になり、更に、学術的データが蓄積していけば〇〇学会にまで昇華するのもあり得ない話ではありません。

単なる興味で始めた趣味が学会まで発展するというのは、それはそれで素晴らしい事に違いありません。

私の白鳥との出会いは、その越冬地のすぐ傍で生活していながら、大学一年まで待たなければなりません。大学に入り動物研究会という同好会に属することで野生動物を再認識し、彼らの持っている緊張感に魅了されました。そんな時思い出したのが、実家の近くの佐潟に野生の白鳥が越冬していた事です。その年の冬休みに早速、佐潟に白鳥を見に行きました。

白鳥の生態など全く知らない頃でしたので、お昼頃に潟に行ったら数羽居るだけ。それも、潟は今のよう整備されていなかったもので、遠くに見えるだけでした。でも、私を白鳥界に引き込むには十分な出会いでした。野生で生きる白鳥の持つ、張り詰めた雰囲気、緊迫感、すがすがしさ、この鳥を知りたい、単純にそう思いました。それから、佐潟詣でが私の冬のスケジュールに組み込まれました。それから白鳥に関する本を読み、本田さんに出会い白鳥の会を知りました。初めて参加した研修会は、年の福島・阿武隈川大会でした。そこで、多くの会員の方とお話できました、松井会長とも。そして、皆さん、それぞれの白鳥との関り方、興味のある所も異なるのですが、本当に白鳥を楽しんでいると感じました。でも、これだけの地域、会員数になると、ともすると窮屈な学術論になり勝ちなのですが、この会は純粋に白鳥を愛し、それぞれの立場で楽しんでいる。会があって会員があるのではなく、会員一人一人の白鳥への思いが会を形づくっている。そういう“白鳥の会”であることは、松井会長の会に対するコンセプトであったのではと思います。みんなに白鳥を楽しんでほしい、みんなに白鳥を知ってほしいという松井会長の思いが白鳥と人を。人と人を繋いで白鳥を楽しむ道、いうなれば“白鳥楽（はくちょうがく）”を作り上げたのでは、と思います。改めて、そんな白鳥楽を教えてくれた松井会長に感謝するとともに、ご冥福をお祈り致します。

松井繁先生を偲んで

林田 恒夫

085-0011 釧路市旭町23番地4

松井先生の電話での「はい、松井です」の明るい軽やかな声が聞かれなくなってから一年になろうとしています。私の中では未だに電話をすれば何時でも「あの声」が聞かれるように思っています。

先生は“白鳥の松井”と云われ白鳥の写真家として有名ですが、私が先生とお会いしたのは1962年(昭和37年)1月に阿寒町の故・山崎定次郎さん宅(現阿寒国際ツルセンター)です。家の前に当時話題になった三菱自動車が生産した500ccの小型の普通自動車コルトが止まっていた。自家用車で来ている人はどんな人だろうと思いながら家に入ると、そこに居合わせたのが松井先生でした。私はその年に鶴に魅せられ撮影を始めたのですが、1960年頃から網走から年に数回は撮影に来ていたそうですから、私より鶴の撮影は早く、おそらく“白い鳥”に魅せられていたのではないかと思います。

医業が忙しく遠出が出来にくくなり、地元の涛沸湖の白鳥を撮影しているうちに白鳥に魅せられていき、1963年3月の涛沸湖全面結氷による餓死の白鳥を目にしてその保護に手を差し伸べると共に、白鳥が愛しい白い鳥になったように思います。

1964年に札幌で病院を開業してから、別海町尾岱沼の野付湾に大集結する白鳥を撮影するため、冬夜汽車による札幌から尾岱沼通いが始まり、1965年2月に二度ほど同行して撮影したことがありましたが、それはそれは楽しげでした。その時と日本野鳥の会と北朝鮮との“鳥の交流”で代表団に先生と私が加わり1991年3月と11月に二度一緒に北朝鮮に行きましたが、11月の時ピョンヤン郊外で川にオオハクチョウが5羽おり、初めて出会った外国での白鳥に大喜びで撮影していた姿が忘れられません。

先生の業績を考えると、白鳥の保護のために愛護者ばかりでなく研究者を参加させて学術的裏付けを考えた「日本白鳥の会」を設立したこと、さらに白鳥は渡り鳥であるから国内だけの保護ばかりでなく生息地や渡り中継地の保護を考え“水鳥と湿地保護のためのラムーサル国際条約を提唱した国際NGOのIWRB(国際水禽局)の日本委員会を創立したこと、1981年には日本白鳥の会会長、IWRB日本委員会会長に就任して、長く国内外の白鳥や水鳥に保護に尽力されたことがあります。

忘れてならないのは、先生の努力で日本での初めての水鳥保護の国際会議が札幌で1985年2月開かれたことです。「白鳥と鶴のシンポジウム」と名づけて開かれました。20ヶ国から150人の研究者や関係者が来札して、1週間熱心に会議が行われました。その恩恵で世界の鶴の状態がわかり、私にとって先生が世界の鶴の私の撮影に道をつけていただいたと感謝しています。

私の中には何時も先生は生きており、先生を見習って鶴の保護に努力して行きます。

松井先生と私

藤巻裕蔵

072-0005 美唄市東4条北2丁目6-1

「ハイ、松井です」。いつも松井先生から電話がかかってきたときの第一声である。だいたい電話がかかってくるのは、なにか依頼事項があるときである。明るい声で、この挨拶から始まると、多少のことではお断りできなくなってしまう。しかし、もうこのような声を聞くこともできなくなってしまった。最近お会いしたのは、浜頓別で白鳥の会の研修会が開催された2003年4月である。このときには、往復の列車、音威子府～浜頓別往復のバスでも一緒であったが、これが先生とお会いする最後の機会になってしまった。

私と松井先生との出会いは、日本白鳥の会のできる前である。まだ大学院に在学中のことであったから、1960年代前半のことであったとおもう。当時、北海道で野生動物を対象として写真を撮影している人はまだ少なかった。そのためか、自然発生的に野生動物の写真に関心のある人たちが集まり、北海道野生動物写真研究会を結成した。私はとくに写真をよく撮影するほうではなかったが、ネズミや鳥の調査の合間に300mmのレンズをつけたカメラで偶然に出会った動物を撮っていた。そんなところから、私もこの研究会に参加させていただいたわけである。手元に保存してある野生動物写真展のパンフレットを見ると、第2回写真展の開催が1966年10月であったので、第1回はその前年だったはずである。数回の写真展で、松井先生の出品作品はほとんどがオオハクチョウであった。

このようなきっかけで、松井先生と知り合うことなり、日本白鳥の会設立の際には、会員になるよう誘われた。松井先生が白鳥の会を設立されるようになったきっかけは、

ハクチョウの写真撮影で全国をまわっているうちに、各地のハクチョウ渡来地で保護活動にたずさわっている人々との交流であったと聞いているが、会員にはハクチョウの保護活動に関係のある人たちだけではなく、ハクチョウに関心を持っている人を広い範囲で勧誘していたのであろう。

私は、小さいときから動物が好きで、中学生のころからは野外で鳥の観察を始め、鳥を見るのが趣味の一つであった。高校時代には、隅田川の両国橋付近でユリカモメを観察したり、千葉県の新浜でシギ・チドリ類を観察していた。しかし、その後野ネズミや鳥を研究対象にするようになり、これらの生態の研究を進める中では、動物の生活と自分の生活とを切り離して考えるようになっていた。これとは別の生き方もあるのだと教えてくれたのが、松井先生の「白鳥の幻想」（「鳥の歳時記5、冬の鳥」に掲載、学習研究社、1983年）である。この文の中では、ハクチョウとの出会いに始まり、保護活動から国際的なハクチョウ・シンポジウムの札幌開催までのさまざまな活動が紹介されているだけでなく、本業の診察の合間をぬってのハクチョウの撮影、撮影のために歩くことを心臓病後の健康回復に生かしたりすることが書かれている。まさにハクチョウが普段の生活の一部になっているのである。この文からは、松井先生のハクチョウに対する熱い思いが伝わってきたし、読んだときの印象は強烈であった。松井先生というと、いつも思い出すのはこの「白鳥の幻想」のことである。

松井先生は、国内での活動だけではなく、国外との交流にも熱心であった。渡り鳥であるハクチョウの保護のためには、国内だけではなく、国外の状況の把握、情報交換の必要性を強く感じていたからだとおもう。上記の札幌でのシンポジウム開催のほかに、私が記憶しているだけでも、日本白鳥の会としてイギリスのスリムブリッジをはじめとする水鳥保護区の視察旅行、ロシアの研究者を招いての話し合い(写真参照)、サハリン州政府の野生動物担当者ズドリコフさんの北海道への招待・道内ハクチョウ渡来地視察、サハリンへのハクチョウ渡来地と渡り時期のハクチョウ生息状況の視察、レナ川中流部におけるハクチョウ調査などを実施した。私はこれらの交流・調査に一会員として参加させていただいた。レナ川の調査のさいは、松井先生は健康状態がおもわしくなく、残念ながら参加を見合わせなければならなかったが、それ以外ではいつも先頭に立って活動されていた。

葬儀の式場で、松井先生は白いキクの花の模られたハクチョウに囲まれていた。先生にとって最後までハクチョウが生活の一部であったのだと改めて強く感じた。今はハクチョウとともに大空を飛んでいるのではとおもう。

思い出に残る松井繁先生と過ごした日々

星子廉彰

061-0222 当別町元町 104

*1977年の日本白鳥の会・イギリス野鳥見学の旅に参加しました。特にスリムブリッジの国際野鳥研究所で世界中のガン、ハクチョウ、ガモが自然のまま飼育されていたのには感動しました。

*1980年、日本白鳥の会会長として、札幌で開催された日本 I W R B 主催のハクチョウシンポジウムに、広く世界から関係者を招かれました。シンポジウムでは充実した研究発表が行われ、更にスリムブリッジの国際野鳥研究所マッシュウズ博士との再会は、大きな実りあるもとして収穫でした。

*1993年、日本白鳥の会の総会・研修会が美唄市で開催されましたが、海外からは特にロシアサハリン州狩猟管理局のアンドレイ・ズドリコフ主任技師が招かれ、サハリンや千島列島のハクチョウの生態・保護の講話があり、より充実した研修が出来ました。

*再三のサハリン、マガダンの探鳥の旅では、よきリーダーのロシア人とウオッカー時には胡瓜のピクルス漬を肴にくつろいだ一時を松井先生は過ごされていました。

*東北地方で越冬していたアメリカコハクチョウが北上したとの情報を得て、早速空知の水田地帯で大群の中にいるのに会うことが出来た時は感激しました。

*1993年2月12日、北上郡金崎町赤岩堤にトランペッターズワンが飛来しているとの情報を得て、早速出かけ、近くでよく鳴く姿を観察しました。イギリスでは1977

トランペッターズワン。霽降る中、よく鳴いていました。

年に2羽観察しました。

*1993年4月13日、南空知樺戸郡月形町月ガ湖でハクチョウを観察中、早朝5時頃トランペッターズワンが目に飛び込んできました。しばらく観察を続けて、沼から離れる途中、思いもかけず、松井先生の何か珍しいのが飛来していますかとの声にびっくりしましたが、1羽凄いのがいますと報告して別れました。

松井先生には大変お世話になりました。

松井繁先生を偲んで

松木勝彦

311-0063 さいたま市プラザ2-10

平成16年9月27日、勤め先で妻からの電話を受けて一瞬自分の耳を疑った。今、日本白鳥の会事務局の小西さんから電話があり、松井先生が昨夜お亡くなりになったという内容だった。実は、11月20日札幌で、大学出身学部50周年記念の同窓会があり、その前日に松井先生ご夫妻と会食をすることになっており、その日を心待ちにしていた矢先でした。

松井先生とのお付き合いは、忘れもしない昭和37年12月24日、網走市で整形外科医院を開業されていた先生をお訪ねしたのが始まりでした。先生の白鳥の写真の腕前は、当時の文藝春秋12月号のグラビアを飾るほどでした。当日診療を終えた先生に、夕焼けに染まる涛沸湖に案内していただき一面に結氷した湖の一筋の開水面に集まったオオハクチョウを見せて頂いたのが昨日のように思い出されます。3月になれば湖面も開け、いろいろな水鳥が見られるようになるから、また、お出でなさいというお言葉に甘えて、その後再三網走をお邪魔するようになりました。先生は当時から日本各地の白鳥渡来地を訪れて写真集にまとめ、また、保護活動にかかわる人のネットワークを作りたいという構想を描いておられました。

昭和40年に先生は札幌に桑園中央病院を開院され、診療と病院経営の傍ら北海道野生動物写真研究会の活動にも主力メンバーとして活躍されていました。昭和42年の寒

波で野付湾が氷結し尾岱沼春別川河口も凍結し多くのオオハクチョウが飢えに苦しんでいるときに、北海道放送TVの番組に出演し、たまたま札幌駅前通りの三菱ショールームで開いた会員の写真展の写真を餌代のために買い上げてくれるよう訴えたことも忘れられない先生の一面です。

北海道内ばかりでなくその後、日本各地の白鳥渡来地をまわられ、天性の人を魅了する包容力で各地に人脈を作られ、昭和48年6月に設立された本会の下地作りに貢献されたと思います。昭和43年に先生は大病を患われましたが、健康を取り戻され、昭和50年には悲願の写真集「日本の白鳥」を上梓されました。この写真集には写真に加えて当時の日本の主な白鳥渡来地36箇所が紹介もされており、往時を物語る貴重な資料になっています。

先生は白鳥の渡りルートの解明にも情熱を注がれ、自ら車で道内各地を回られ地元の人に、返信先を書き込んだ葉書とお礼のしるしのタオルをセットにして渡し、白鳥の渡りに関する情報を蒐集されておられていたのも思い出のひとつです。また、国際的にも活躍され、IWB日本支部の設立に尽力され、昭和55年2月には札幌市でIWB国際会議「ハクチョウとツルのシンポジウム」の開催には大きな役割を果たされたのは記憶に新しいことです。

本会の発展のためには、長年に亘り事務局を桑園中央病院内に置いて、東京で行われる年次総会のお世話をはじめ会運営の基礎固めして下さったと言ってしまうのではないかと思います。

先生との思い出には、網走原生花園の砂丘の上から流氷の上を帰北する白鳥の群れを見送ったことや、ご家族と一緒に夏の石狩太美の原野でシマアオジ、ノビタキ、コウライキジなどの野鳥を観察したこともあります。それにも増して忘れられないのは、先生を団長とし行われた1995年（平成7年）5月のサハリン白鳥ツアー参加させて頂いたことです。5月1日の小樽からの船出から7日の稚内帰港まで、夢の中にいるような至福の時間でした。

昭和37年12月24日以来、先生を介して多くの素晴らしい人たちとの出遭いがありました。楽しい思いをさせて頂きました。本当にいろいろとお世話になり感謝の気持ちで一杯です。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

安らかにお休みください。

松井先生を偲んで

宮越武夫

098-0475 士別市多寄町32線西5号、多寄白鳥を守る会

「はあい松井です」、電話口のあの声が今でも私の耳に焼きついて離れません。私と先生のお付き合いは、平成2年2月のことでした。多寄公民館が当時日本白鳥の会の会長だった松井先生をお招きしてハクチョウの講演を実施することになり、先生には快く引き受けていただきました。ハクチョウの生態や渡りの行動等について、とても分かりやすく講演していただいたのが始まりと記憶しております。

それ以来地域の人たちも一段と関心をもってハクチョウに接するようになり、平成の初め頃は、春にしか立ち寄らなかつたハクチョウが、次第に増え続け、平成5年頃からは秋にも逗留するようになり、春は3月初め頃から5月の節句頃まで、秋は10月半ばから11月下旬まで見られます。現在は、4月の20日頃には3500～3600羽ぐらい、11月半ば頃には2500～2600羽ぐらいが逗留して、一年の三分の一は多寄で過ごすようになりました。

昭和48年頃、5～6羽で、とても珍しかった事を考えると、えらく増えたものと驚いています。今はこの飛来地も多寄「白鳥の宿」と名称がつき、春・秋のシーズンには、大勢の見物客と地域の人達のやすらぎの場になっております。

このことは、日頃陰に陽に常に私共に御指導下さった松井先生のハクチョウに対する愛情の賜とっております。

先生はとても気がやさしく親切で、私のような田舎者にも気軽に声をかけて下さり、お陰さまで、日高の静内での研修会に始まり、宮城県の大河原町、稚内、浜頓別のクッチャロ湖等での研修会、さらに平成7年5月の連休には、ロシアと日本との親善航路第一号として小樽港からサハリン7号に乗船、日本白鳥の会の会員23名の一人として参加させていただき、大勢の先生方と行動を共にさせていただいたことは、私には何物にも替えがたい体験となりました。大泊(コルサコフ)に着いた時に、松井先生が船べりで藤巻先生の奥様と私が海面を眺めているところを写したスナップ写真の引き伸ばしたのを送っていただき、大切にしまっております。

平成10年5月初めにまだハクチョウが我が家の近くに残っていたので、先生にお電話したところ、札幌からカメラを背負ってはるばる来てくださり、楽しそうにシャッターをきっておられました。家内の俄造りの昼食をうまいうまいと食べられました。一寝入りしてから近くの日向温泉に案内して温泉につかりハクチョウ談議をしたことが、ついこの間のような気がします。もう一度日向温泉にお招きして、お湯につかりながらハクチョウ談議を目論んでおりましたが、急にお亡くなりなり、残念でなりません。

札幌厚生年金会館で、先生の「白い恋人たち」シベリアの使者の写真展発表の折も、

お招きいただき、大勢の先生方の集まりに驚きました。また夜にはホテルまでお手配され、あの気配りには本当に言葉に表せないほど先生の温情に感銘いたしました。

ここに謹んでお世話になったことに対しお礼を申し上げ、安らかにお眠り下さるよう心からお祈り申し上げます。

私も大正10年生まれで、そろそろお迎えがくる齢になりました。今後何年できるかわかりませんが、健康に留意して、体力の続く限り春・秋はもとより、12～13年前から天塩川で越冬を続けているオオハクチョウの給餌と観察を続けるつもりです。大吹雪でない日には毎日リュックサックに餌を入れ片道2km余りの雪の中をスキーで往復するのが私の日課です。

松井先生との思いで

村瀬美江

024-0012 北上市常盤台2丁目2-17

平成16年秋、浜頓別事務局より松井先生他界のお知らせを受け、ただ驚愕し、悲しみに包まれました。

松井先生に初めてお目にかかったのは、1979年6月ウトナイ湖の日本野鳥の会の全国大会でした。その後、1987年4月アメリカコハクチョウ「クロチャン」が北上へ初の子連れで渡来越冬中に、北上川河原へお一人でお越しになりました。このときご案内しながらお話を伺い、白鳥の会入会の誘いを受けました。日本初渡来のトランペッターズワンが北上へ二度目の渡来するときも赤石堤においで下さり、亡き主人共々ご案内しました。

サハリン白鳥ツアーもお誘いいただき、楽しい思い出が出来ました。レビヤジエ湖では2万羽のハクチョウがかげろうにゆらめき、バスの中ではクマゲラを見た人、見ない人もおり、ミユビゲラの声も耳にしました。

「クロチャン」を通して長い年月にわたり多くの教授をいただき、数々のことが思い出されます。お電話の「松井です」のお声もなつかしく思われます。

有難うございました。

恩師・松井繁先生を想う

八木 博

960-0102 福島市鎌田字赤沼21-3

阿武隈川にハクチョウが初めて飛来したのが、昭和45年1月7日の事でした。日毎に数が増してきて26羽のオオハクチョウが川面で優雅な姿を浮かべていました。当時福島県では猪苗代湖だけが白鳥飛来地でした。川の流れの飛来地であることが珍しいのか、新聞、テレビなどに取り上げられ多くの人達に知れわたってきて、福島の冬の風物詩として全国に報道されました。各地からの手紙や電話の問い合わせがあり、種々回答しました。

昭和48年2月に「札幌の松井ですが」と自宅に電話があって、全国の白鳥飛来地の写真を写しているのので、阿武隈川のハクチョウを訪ねたいとの電話で、案内を約束しました。福島においでになり、寒風の中愛用のハッセルブラードカメラで記録を写されていました。札幌からお越しの松井先生を岡部白鳥愛護会では地元の野菜料理で歓迎会を開催しました。歓談の中に「日本白鳥の会」の発足についてお話があり、上竹二郎さんと私の二名で東京で開催された「日本白鳥の会」発足に参加致しました。全国から白鳥飛来地の方や関係者の方、外国人など皆さんが広く出席され、松井先生の人柄と器の大きさに感動しました。この事がご縁で電話、手紙等でハクチョウや野鳥

生態についてお尋ねし、図鑑に書いてない事もアドバイスを受けてより以上に知識を得ることができ間違いのない指導を出来るようになったのも松井先生の御蔭と感謝しております。

30年余年のお付き合いのなかにも数多くの思い出があります。1997年にサハリンに白鳥ツアーを白鳥の会で企画され、松井会長さんを含めて23名の参加で1週間共に過ごしました。初めての海外旅行で、私にとっては忘れられない思い出になりました。

サハリンでは道路の整備が遅れていて、四輪駆動のバスで身体全体が大揺れの中の探鳥で経験の出来ないようなツアーでした。日本と違って身近にハクチョウを観察できませんでしたが、本当の野性のハクチョウとの出会いでした。ズドリコフ・アンドレイ鳥類専門家から、サハリンを渡るコースについても大きな地図で通訳を通して分かりやすく説明を受け、大変に勉強になりました。

帰国前日の夜、宿泊していたホテルの一室に参加者全員で集まり、ユジノサハリンスク市内で仕入れたタラバガニの食べ放題で打ち上げで、各自日本から持参した日用品、食品などの残り品物を皆で持ち寄り、今回のツアーでお世話になった現地の方々にプレゼントをし、感謝に代えようとさしあげる事になりました。物資の少ない地なので、喜んでいただける事でしょう。松井会長さんの発案でした。

会長さんの打ち上げの挨拶の中で、「天気もよく、あの人たちの厚意も一杯ありました。私自身の一生の中で今回が一番楽しい旅行でした。皆さんもそうであったろうと思います。何処に行った、此処に行った、みな精進が良かったおかげで、この一週間大変良い天気、精進のおかげで人を疑わず・・・今日はそう思っております。10人位の参加者と考えておりましたが、こんなに来てもらい、アンドレイをはじめカラフトの皆さんが喜んでおります。彼らの厚意がひしひしと感じられ、いい旅でした。昨日はクマ撃ちと一緒に歩きました。一生の内にこんな旅行はもう出来ないだろうと思っており、喜んでいます。本当に皆さんの精進の結果、いい写真もとれたし、いい思い出も一杯出来たと思います。これみな精進のおかげと思います」と反省をかねた喜びの挨拶でした。帰りの日も、静かな海を全員事故もなく予定の時間に帰国ができました。これみな「精進」のおかげと感謝しています。

2年後の1997年7月13日～25日の日程で、ロシアのサハ共和国レナ川中流のオオハクチョウに関する調査があつて、松井先生から参加のお誘いがありました。一度は行ってみたいロシアでしたので、参加する事にして準備に取り掛かりました。欠員ができたので家内のほうにも、先生からお誘いがありました。私の退職記念として共に参加することにしました。約2週間の海外の旅行に出掛けるのは私達にとって初めての事でしたが、どうにか都合をつけてロシアに向かいました。

飛行機の窓から見える本当の青い青空、何時間も続くタイガ地帯はさすがロシアの風景です。ヤクーツクから白夜のレナ川を船で下り目的地のサンガルに着き、飛行機で一本の道路もない自然の原野を上空から調査しました。調査船がホテルに変わってモーターボート3艘で川沿いや中州のできた沼などに行きました。ハクチョウ、カモ類の餌になるような水草がどこにでも見られました。野鳥が長い距離を移動してくる

意味がわかったような気がしました。

サハリンでは体験出来なかったことや多くの動物との出会いなど、私にとって素晴らしい調査旅行でした。家内共々お金では買えない大きな心の財産が出来ました。

これもひとえに松井先生からのお誘いがなかったら体験できないことです。松井先生との出会いがなかったとしたら、詰まらない老後を送っているかと思うと「ぞおっと」します。

松井先生のご逝去のお知らせが、青森の古川博さんからありましたが、服島市での白鳥のイベントが重なってしまし。出席できませんでしたので、毎年、4月末には宗谷方面にハクチョウたちの旅立ちの様子を観察に行く途中、札幌の松井先生の自宅にご焼香に立ち寄った際に、奥様の陽子さまから先生が愛着していた防寒着、チョッキ等を八木さんに着ていただければ主人も喜ぶでしょうとお言葉をいただきました。私もいただいたチョッキを、自然に飛び出すときはいつも愛着しようと思っております。何時でも恩師松井先生と一緒に自然の中で過ごしたいと思っております。

最後になりましたが、松井繁先生、本当に数々のご指導をありがとうございました。

松井繁先生を偲んで

八木トミ

960-0102 福島市鎌田字赤沼21-3

松井先生との出会いは、福島県鏡石町で行われた日本白鳥の会研修会だったと思います。とても温和な会長さんだとお見受けしました。アホウドリ研究で有名な長谷川博先生の北極圏で繁殖するコハクチョウの営巣写真に魅せられ、又そんな遠方まで何故渡るのかと疑問でした。以来、各飛来地で開催される研修会に参加をし、会員の皆様との交流も深まりました。研究発表では青森県むつ市三上士郎先生のコハクチョウの嘴の見分け、岩手県北上市村瀬正夫夫妻のアメリカコハクチョウ一族の調査等、頭の下がる研究発表がありました。

年ごと女性会員も増え、華やいだ夕宴となりました。手造りのホタテが振まわれたり、カニ一匹お膳に乗ったりと開催地の方のお気持ちに感謝してご馳走になりました。横手のかまくら祭ではローソクの灯の幻想的な中甘酒の接待を受けた時、先生のお顔は童子以上にこやかでした。みやげ物の物色で遅刻したむつ湾では、恥じる私を笑顔で迎えてくださいました。楽しみは、先生を囲んでの二次会でした。会員のみやげ品に舌鼓、先生のトバと奥様心遣いのお菓子を食べ、夜遅くまでハクチョウ談議にふけりました。そんな時にもこやかにされ首を縦に振ってうなずいておいででした。

1992年6月、私の退職記念に北海道旅行をしました。仙台からフェリーで苫小牧に渡り、札幌の先生の自宅に直行しました。道路向いが病院で、現職医師の松井先生は白衣姿で見えられ、カキトウシの薬草茶を飲まれました。「毎日お茶替りに飲んでいきますのよ」と奥様。知人の庭で採取し乾燥させてお送りしたもので、まさか飲んでい

ただけるとは思っていなかつたことでした。夕食は市内の中華飯店でいただき、お二人の会話からも先生のお人柄が伺えました。ホテルの部屋まで送っていただき、翌朝は運転手さんが高速道路の滝川まで道案内、狩勝峠を越え然別湖へ、レンジャー崎野隆一郎氏とクマゲラの営巣を観察し、夜はシマフクロウの太鼓を打つような鳴声を聞きました。クッチャロ湖では山内昇氏と原生花園をめぐり、クロユリのじゅうたんを敷きつめたような湖畔を散策、春はハクチョウの集結地で何千羽がサハリンに向かって渡去するとのこと。予定外の礼文島に渡り、初対面の中村夫妻の出迎えで島内の桃岩山、トド岬をめぐり、6月なのに寒かったこと、ペンションも消灯と同時に天井に星座が浮かぶロマンチックな部屋でした。これらすべて松井先生ご夫妻のご配慮で、感謝しつつ幸せ一杯の記念旅行でした。

1989年2月の研修会で、アンドレ氏のサハリンの渡りコースの講演があり、機会があれば是非行ってみたいと思っておりました。1995年5月、白鳥の会会員有志がサハリンを訪れましたが、私は娘の結婚式のため涙をのんで断念しました。翌年主人とノグリキまで列車の旅に参加しました。

1997年7月、日本とロシア共同での調査計画があり、「八木さんもご夫妻でどうですか」と先生からのお電話で、調査隊のオブザーバーとして参加いたしました。

ロシア極東、サハ共和国、酷寒の地も7月は真夏でした。ヤクーツクの生物学研究所の専門研究員と日本人8名とロシア最大のレナ川を船で一昼夜下り、ビルイ川との合流点で停泊し、そこから小舟3隻に分乗して中州に渡り、ハクチョウの営巣を探索しました。いよいよ明日は迎いの飛行機が来る日、所長と3人で上陸した島内を蚊の大群に悩まされながら長時間歩き、疲れ切った身体にどしゃ降りの冷たい雨の洗礼でいや気がさしていた時、こんな所だと指差した彼方に1羽のハクチョウの優雅な姿を発見し、固い握手で喜び合いました。帰りを待っていてくださった皆様とは、山内昇氏持参のお酒で乾杯をしました。翌日ハクチョウを飛行機で陸に追い上げる予定でしたが作戦は失敗、川面を這うように飛び去ったのです。先生はこのロシア極東・レナ川の調査に参加を切望され、ご尽力されたのですが、体調が勝れず辞退されて私達夫婦に声をかけてくださったのです。

ハクチョウを愛し、自然保護を強調されていた松井先生は、今、蛇行するレナ川と群生するヤナギの桃源郷の上空を、純白のハクチョウの背に乗って北極圏へ旅立たれたと想像しています。

8年前の今日を思いおこし記しました。

2005年7月22日

松井先生とクッチャロ湖の白鳥たち

山内 昇

098-5738 浜頓別町緑ヶ丘

1963年(昭和38年)以来、浜頓別町で国有林の職場を得ながら、クッチャロ湖の自然を見続けてきた。特に白鳥については、一入なものがあった。私は、樺太遠漕村ブッセ湖(現サハリン州ムラヴィエヴォ村ブッセ湖)生まれ。子供の頃から、白鳥やカモなどは身近に慣れ親しんだ動物であった。

クッチャロ湖の自然、特に白鳥との再会が、切っ掛けとなりライフワークにし、この町に骨を埋める決意をした。今年で、74歳と言う人生を振り返ってみると、60年間以上も野鳥との関わり合いを持ってきて、その内36年間もクッチャロ湖の白鳥とのつき合いをさせて頂いた。

一個人では保護など何も出来ない者が、みんな廻りの(町内外の)素晴らしい人達に恵まれ、陰に陽に励まされ、職場の中でも故人になられた方々も含め、日夜問わず応援して頂いた。その中でも、松井繁先生には、公私共に多大なご高配を頂いた。

1970年(昭和45年)頃、松井先生との初めての出会いは湖畔で白鳥に給餌をやっている時だったと記憶している。先生は、未明に飛去(北帰行)する白鳥を撮影し終え、白鳥に給餌をしている私に何をしているのかと訊ねられ、死んでいるので助けていると答えた。種々話をしているうちに日本各地を撮影に訪れているが、各所で色々と苦勞しながら白鳥の保護に関わっている人が多い。私も初対面の先生に自宅までおいで頂き白鳥談義をした。私にはこの出会いから、松井先生との長いお付き合いをさせて頂いた。

そして、日本白鳥の会1973年(昭和48年)設立。松井先生から「いずれも白鳥が好きで好きで堪らない人達ばかりなんだ。もしよければ参加しないか」との話、一、二も無く是非、加入したいと申し入れた。松井先生は「全国各地の白鳥愛護者を一同に会し、保護思想を高揚させようではないか」と各地で白鳥に携わっている人達に呼びかけた。設立された日本白鳥の会が縁で、各地の関係者とも大きく交流ができ、クッチャロ湖も全国の仲間入りができた。

1973年(昭和48年)の秋から何年か、松井先生と共にクッチャロ湖の白鳥の旅を調べた。クッチャロ湖の白鳥の飛び立つ方向を調べ、私の車に松井先生が乗り、天塩、遠別など松井先生の知り合いを訪ねて歩いた。まだ、白鳥の渡りが知られていない時代であり、松井先生と白鳥話しをしながら歩いた懐かしい思い出である。

1980年(昭和55年)、白鳥と鶴の国際シンポジウムを松井先生が先頭になって、札幌市で開催された。日本の白鳥を世界に紹介することが出来たのも、松井先生の功績によるものだ。折しも、私も参加させて頂いた。このシンポジウムが契機となりラムサール条約という、この言葉が理解できるようになった。

この年、ラムサール条約湿地指定に第一号として、浜頓別町が名乗りをあげた。故坂下町長も札幌のホテルでは、それはよいことと是非、参加しようと前向きであったが、地元に戻ってからは農業開発という難題に直面し町民の理解を得られなかった。

日本のラムサール条約第1号指定地は、釧路湿原が決定し後に国立公園となった。それから、9年目の1989年(平成元年)、全国では、三番目としてクッチャロ湖が長年の願望が適いラムサール条約に指定される。国際的に重要な湿地として、地球規模で保護される条約に認められた訳で感無量であった。色々とマスコミ等に取り上げて頂き、国を上げて協力して頂いている。

1993年(平成5年)には、松井先生が南サハリンの白鳥の中継地調査の折に現地で案内をしてくれたサハリン州執行委員会狩猟経営面主任技師、ドリコフ・アンドレイ・イワノピッチ氏を浜頓別町に招き、福祉センターにおいて講演会を開催して頂いた。サハリンの白鳥の状況など野生動物の調査と保護を仕事としているベテラン技師の話をお聞きする貴重な機会を作ってくださったのも松井先生のご協力によるのであった。

1995年(平成7年)、ラムサール条約に指定されたクッチャロ湖畔に環境省が水鳥観察館を建設された。この建物は、湖畔を一望できるカメラも設置されて暖かい室の中から、クッチャロ湖の全景を観察することができる素晴らしい施設で、町を訪れる観光客も大きく増加し、入館者には大変好評を得ている。

この年、念願であったサハリン白鳥ツアーに参加できたのも松井先生のご尽力の賜物である。また、1997年(平成9年)には、長年の夢であったシベリアの繁殖地を調査する機会も与えて頂いた。しかも今までのように各国の多数の人たちが調査・観察をした地域とは違い、シベリアの東北部を流れるレナ川の中間地域で、サハ共和国ヤクーツク市より下流の北極圏に近い白鳥の未知の地帯であるとの松井先生からの話だった。残念ながら、松井先生が入院されたため、一緒に行くことは叶わなかったが、この調査に参加させていただいたのも先生のご配慮によるものであった。ご自身のご病気にも関わらず、出発に際してご心配して頂き、帰国後、直ぐにお見舞いに伺うとたいへん喜んで頂いた。

松井先生は、忙しい病院の仕事の合間をぬって、浜頓別町には、春の渡りの際に何度もお越し頂いた。宿をとっているにもかかわらず、白鳥の話で盛り上がり家に泊まって頂く事も何度もあった。日本白鳥の会の研修会も3回開催して頂き、全国に浜頓別町を紹介して頂いた。日本各地の白鳥の仲間もでき、誰もが白鳥を愛する人ばかりで、本当に素晴らしい出会いができた。今日、浜頓別町が白鳥の町としてあるのも浜頓別町において、特段のご助言、ご配慮を頂いた松井先生の功績によるものである。松井先生がいなかったら、浜頓別町は白鳥の町にはならなかった。人生の中で、これほど親しくさせてもらった松井先生に出会えた事に感謝しています。心よりご冥福をお祈りいたします。

<資料>「野鳥」344号(1975年5月号)からの転載

北海道におけるハクチョウ類、特にコハクを 主とするグループの渡りルートについて

松井繁・玉田誠・山内昇

はじめに

ハクチョウ類の渡りについては、シベリアから樺太、北海道、本州に現われるものと、カムチャツカ、千島列島、北海道、本州への二通りのルートがある、と言うのが、最近の定説のようである。

島根県の中海のハクチョウは、従来朝鮮半島経由で渡来する、という説があったが、内田映(昭49、しまね野鳥の会会長、日本白鳥の会会員、以下会員と略)は朝鮮半島経由説には疑問があり、いわゆる北日本経由と考えており、福島県猪苗代湖のハクチョウはシベリアから北西の季節風によって直接猪苗代湖に渡来する、と大森常三郎氏(昭50、獣医師、会員)は述べている。(松井注、いずれもその殆どがコハクチョウ、以下コハクと略)。

犬飼北大教授(昭17、現名誉教授)は北海道に渡来するハクチョウの殆どはオオハクチョウ(以下オオハクと略)であり、きわめて稀にコハクがその群に混入している、と述べ、オオハクの北海道の移動ルートについては詳述しているが、コハクについては、樺太亜庭湾には比較的多く、このコハクが冬期どこに飛び去るのか疑問である、と述べている。また阿部学氏(昭38、農林省林業試験場保護部鳥獣第一研究室、会員)は冬

期間を通じて、北海道内ではたとえ一時期であろうとも多数のコハクが観察されていないのは、或るいはオオハクと渡りのコースを異にするのではないかと述べている。

ところが、昭和45年10月24日に堀内盛一氏(環境庁自然保護局鳥獣保護課、会員)が、道北のクッチャロ湖で506羽のハクチョウをカウントしたが、手前の6割はすべてコハクであり、遠方の4割も体形、姿勢からコハクと推定した事実がある。

日本白鳥の会が昭和48年に設立され、同年秋から国内各地で白鳥の観察が続けているが、道東の渡来地からの報告ではコハクの確認はできなかった(図1参照)。けれども、クッチャロ湖で観察をしている著者の一人山内、道東の涛沸湖で観察をしている著者の一人玉田から興味ある事実が提起されてきたので、その他の事実や、他の記録、また道東のウトナイ湖での調査などをまとめて報告し、ハクチョウ類の渡りについて考察を加えてみたい。

観察記録

1. 山内、玉田の観察

山内のこの3年来の観察によると、クッチャロ湖には、最盛期には3,000羽以上のハクチョウ類が渡来しており、昨年秋の観察結果は表Iであり、そしてその殆どがコハクである。玉田はここ数年、10月下旬から11月初旬にかけて、一日のうち1,000羽を超えるオオハクチョウが渡来してくることに気がついた(表II)。昭和48年11月2日の朝7時27分から午後3時52分までに3,000羽近く渡来し、昭和49年10月30日には

1,600羽を超えるオオハクが渡来した(玉田は涛沸湖畔の北浜の中学校教師であり、白鳥クラブの指導をしている)。48年11月2日には、山内、松井は午前5時30分から午後3時までクッチャロ湖で観察をしていたが、ハクチョウの移動を観察せず、その数は800であった。また山内の観察(表I)では昨年10月29日は350羽、10月30日は400羽、10月31日は500羽(いずれも殆どコハク)であった。なお、クッチャロ湖の北にポロ沼があるが、ここは鳥獣保護区でなく、また北海道では10月1日から猟期に入るため、秋には殆ど定着しない。

クッチャロ湖への春の渡来は3月下旬から始まり、最盛期は4月中旬で、2,000羽を超え、またその殆どがコハクである。4月下旬にはポロ沼に移動するが(表III)、間もなくここから樺太へ渡去していく。

一昨年11月、山内はクッチャロ湖の西方の仁達内の山中(以下図2参照、山内は営林署員)で、前後3回にわたり、二十数羽のコハクが南西の方向に、昨年11月には、石炭別の山中で十数羽のコハクが南々西の方向に、またクッチャロ湖畔でも数百のハクチョウが何群にも別れ、南西の方向に渡って行くのを何度も観察している。

2. 松井のスクラップブック及び白鳥に関する備忘録から

以上のことから、道東のオオハクとは異なる、クッチャロ湖のコハクを主としたハクチョウ類の渡りのルートがあると考え、新聞その他のマスコミのハクチョウの渡りに関する報道を松井のスクラップブックから、また松井の白鳥に関する備忘録から渡りの記録を、経時的に整理してみた。

▽昭44・4・4・北海道新聞(以下道新と略)。

旭川市内の石狩川の秋月橋下流に4羽の白鳥。写真によると、うち2羽はコハク、1羽はオオハク、1羽は不明(以下図3参照)。

▽昭45・6・1・さっぽろまんてん誌

中村耕人氏が、深川市の西方の北竜市街で、45・4・10、午前8時50分、約70羽の白鳥の北帰行を視認(後日電話で問い合わせたが、オオハク、コハクの別は不明)。

▽昭45・7・22・朝日

オオハクの幼鳥が、岩見沢市街の北村の幌達布で羽根が傷つき、保護された。

▽昭47・4・11・読売

江別市内の石狩川でコハクの幼鳥を保護、札幌円山動物園へ送る。(電話でコハクであることを確認)。

▽昭47・4・26・道新

青森県野辺地の林業試験場から逃げたコブハクチョウと、まだ帰途についていないで野辺地にいたオオハクが合流し、しばらく野辺地付近にいたが、青森県内から姿を消した。かれらを4月20日ウトナイ湖で発見。

▽昭48・4・10・道新

砂川市役所裏の旧石狩川に4羽の白鳥が羽を休める(写真ではオオハク、コハクの識別不能)。

▽昭48・11.1・道北日報

士別市剣淵川のほとりの沼で、オオハク4羽が憩う。

▽昭49・10・30・道北日報

和寒町福原の佐瀬紀一郎氏から投書、10年前まで、雨竜山脈の東側の同地は、10月末から11月にかけて、ガンの南下のコースであったが、最近では殆ど見られなくなり、これにかわり、14、5年前から白鳥の南下のコースになり、12月中旬、早い年には10日頃から30～50羽の群が雨竜山脈ぞいに旭川市の江丹別の方面に南下する。(本年は例年になく渡りが早く、11月2日から15日までの氏の観察記録は表IVの通りである)。

▽昭49・11・11・道新

松井が白鳥の渡りのコースで、道北の天塩川と、道央の石狩川流域を通るものがある、と考え、これらの地方で白鳥の渡りを目撃した方がれば、松井まで連絡を、との依頼を掲載。

▽昭49・12・5・道北日報

士別市天塩川、中士別橋の上流500mに約50羽の白鳥(写真参照、藪中氏撮影、いずれもコハク)、2日後に去る(渡来は12月1日)。

3. 松井の備忘録から

▽昭45・10・27、堀内氏来宅・10月24日のクッチャロ湖のハクチョウは全部コハクであるとのこと。

▽昭48・4・24、従妹から47・12月初旬に名寄市18線で他の人と作業中に東から西へ飛ぶハクチョウの群を見たと聞く。

▽昭49・9・13、士別・小笠原勝人医師から電話、11月頃6～7羽のハクチョウが士別付近の湖沼に入る。

▽昭49・10・16、道北日報記者藪中氏と電話、四、五年来秋に日甜ビート工場の排水池にハクチョウが入る。そのほか、同市の温根別、多寄にも入ることあり。

▽昭49・10・17、雨竜発電所(風連町、士別と名寄の間の町)の大島氏と電話で、今から15、6年前、発電所の取水口(人造湖朱鞠内湖の)から500~600m上流で雪融け頃、約一週間五羽のハクチョウを見た。

▽昭49・11・11夜、天塩川上流の佐久の藤田一万氏から本夕の道新を見ての電話連絡あり。同日約20羽のハクチョウが南下(オオハク、コハクは不明)。また同地においては、冬に時々ハクチョウの南下、滞在を見る。昭和42年11月に同地で保護されたハクチョウが旭川市旭山動物園に送られた。(後日電話で、同動物園の飼育係の小原源隆氏に問い合わせをした、コハクと判明)。

▽昭49・11・13、士別の藪中氏から電話、11月9日午後4時30分に同市武徳の上空を6、70羽のハクチョウが南々西に向う。また同日午前7時40分、士別市の上空を約60羽のハクチョウが南へ、その後間もなく剣淵町5区の上空を南々西、和寒町西和の方向へ飛ぶ。(この南が前記の福原)。

▽昭49・11・13、ウトナイの木下氏と電話連絡。ウトナイ湖、今朝は32羽、午後2時の観察で92羽となる。(種類不明)。

▽昭49・11・14、旭川市の鈴木久之氏より来信。48・1・25、旭川市の伊の沢スキー場で上空を26、7羽の白鳥が頭上30mの所を通過。

▽昭49・12・2、佐久の藤田氏から来信。11・17、30羽の白鳥が天塩川にかかる佐久橋の上空を飛ぶ。11・24、午前10時に5羽が北から南へ飛ぶ。昭和44年11月に同橋上から撮影した白鳥の写真を同封してある。6羽いずれもコハクである。

▽昭49・12・5、名寄の武口達男氏談、名寄市の南東の忠烈布の溜池に、毎年雪融け

頃にハクチョウが滞在する。なおここは鳥獣保護区である。

▽昭50・1・30、和寒の佐瀬氏と電話で話す。今年のはくちょうは例年になく早く渡りをした。また不思議に思うことが一つある。それは秋には私の家の上空を飛ぶのであるが、春には渡らない、見たことがないことである。

4. ウトナイ湖での観察記録。

ウトナイ湖においては、昭和36年以来、苫小牧白鳥保護委員会がハクチョウの保護観察を行っており、この14年間、ウトナイユースホステルの前管理人の伊賀岩太郎氏、現管理人の木下茂氏が中心になり、観察記録を作り、報告集も昭和35年から昭和42年までに3集を発行し近日中に第4集ができる予定である。

このハクチョウの観察記録からその数の記録を要約すると、11月は少なく、1月の後半から100羽超えるようになり、2月中旬になると200羽を超し、3月下旬から4月初めにかけて、その数は400以上になり、以後激減する。その数のパターンを48年秋から49年春までの木下氏の記録に基づき、表したのが表Vである。

考察

山内がコハクの南下を観察した仁達内から南西及びクッチャロ湖から南西の方向に当たるのは、藤田氏から連絡のあった佐久付近であり、また石炭別から南々西の方向もやはり佐久で、クッチャロ湖から佐久へ移動したと考えてよいであろう。

また、前述のマスコミの記事、観察記録、連絡などから、経時的、あるいは連続的にハクチョウの渡りの経過を追うことはできないが、秋は佐久、名寄、士別、剣淵、和寒、浦臼、春は江別、北村、砂川、北竜、旭川、名寄と観察点を挙げるができる。ところが、北海道における秋の最後の中継地、あるいは春の本州からの最初のそれについては図1から考えると、ウトナイ湖を挙げると、無難のようであるが、上述の報告などでは見当たらない。

阿部氏(昭38)は、松木勝彦氏(日本レダリー株式会社、会員)の私信によると、苫小牧のウトナイ湖で、昭和34年3月29日に観察したところ、ハクチョウ類総数279羽中近くにいた20羽の群のうち、明らかにコハクと識別できた個体が10羽、オオハクと認められたものが1羽で、他のものは後ろ向きで識別できなかったが、このことから考えて、相当数のコハクがその群にまじっていると思われる、と書いてあったと述べており、また、藤巻裕蔵氏(北海道立林業試験場、会員)、松岡茂氏(北大農学部応用動物学教室)ら(昭48)は、12月、3月にウトナイ湖で数羽のコハクを観察しており、観察間隔を短くして調査すると、コハクが多く見出されると考える。それでもなお、ウトナイ湖において、コハクが多く観察される筈の11月、12月にその数が少ないのは疑問がある。これに関連して思い出されるのは、昨年(昭47)の11月も地方紙に載った、ウトナイ湖において、鮭の密漁の網と舟が相当数没収された、という記事である。北海道において鮭が遡上するのは9月から12月までである。密漁者が網をいれ、鮭をとるのは、夜から早朝である。このために、ハクチョウが定着できず、早々に飛び去るのではな

いだろうか。またウトナイ湖の周辺は広い湿原であり、高い所がなく、遠い所にいる秋のハクチョウ類の識別をしようとして、高倍率の望遠鏡を用いると、かげろうのために、その識別は非常に困難である、と藤巻氏(昭48)は述べており、現在苫小牧白鳥保護委員会ではよい観察塔の建設を計画中である。

ところが、ウトナイ湖が結氷して、雪が積もるのは1月、この頃は、前記藤巻氏らの報告、伊賀、木下氏らの観察でもコハクはいない。最近ハクチョウも大分馴れ、凍った湖上を接近して行き、観察できるが、全くコハクはいないのである。犬飼教授(昭17)は1月になると、風蓮湖の大部分は凍り、根室、釧路の不凍水域を選び、大小の群に分散し、更に十勝方面から、日高方面にも飛び、ウトナイ湖には1月から渡来し始め、2月には数百羽に達する、と述べており、表Vでもこのことを示している。けれども3月中旬以降の羽数の増加はどこからきたものによるのであろうか。青森県の下北半島の基部と胆振地方(ウトナイ湖が含まれ、ウトナイ湖を指すと思われる)との間に渡りのルートがある、と述べた人がある、と聞いたことがあり、その文献を探していたが、入手できず、確認はできなかった。けれども、前述の47・4・24付の道新のコブハクチョウとオオハクが青森県から姿を消し、ウトナイ湖で発見された、という報道はこのルートがあることを物語っているものではないだろうか。更に、ウトナイ湖から南の噴火湾の有珠及び七飯町の大沼(国定公園)でもハクチョウが12月から3月まで定着するが、いずれもオオハクである。このことも、天塩川・石狩川流域を南下してきたコハクは、ウトナイ湖からは北海道を南下せずに、直接下北半島へ、というルートが存在することを示唆しているのではないだろうか。3月になると、根釧原野の湖沼も氷が融け始め、開水面も相当現われるので、ハクチョウは餌に不自由することはない筈であり、この時に十勝、日高を通してウトナイに移動して来るとは考えられない(十勝、日高にはさ程定着していない)。すると本州方面からの渡りを考えるのが自然であり、その意味からも下北-ウトナイルートが考えられる。なお、下北半島の尾駈・小川原湖はコハクの多い渡来地である。

表IIIと表Vから、49・4・1にウトナイ湖では450羽のハクチョウが、2日、3日には270羽に減ったが、クッチャロ湖では4日の130羽から5日には400羽になっており、更にウトナイ湖の7・8・9日は500羽近いが、

14日には殆ど姿を消し、15日のクッチャロ湖は、この春最高の数となっている。ウトナイ湖から渡去したと見られる数とクッチャロ湖の数は一致しないが、観察されずにウトナイ湖を渡去したものがあるであろうし、ウトナイ湖からクッチャロ湖へ渡って行った、と推定してよいのではないだろうか。前述のマスコミの報道では、4月10日前後に石狩川の流域でハクチョウが目撃され、天塩川の流域では、前述の松井の備忘録によると、朱鞠内湖と、名寄での雪融け頃を目撃がある。名寄生まれの松井の経験によると、此の地方の雪融けは、年により多少の差はあるが、この4月10日前後である。前述の佐瀬氏のお話では、春は福原の上空を渡らないとのことであるが、春と秋の渡りコースが多少ずれるのは、松井が前に経験したことがある。昭和39年11月に能取岬の尖端の灯台をかすめて、涛沸湖に向かうオオハクの群を数度見たことがある。それで、春に北へ渡るオオハクの写真を灯台を背景に撮りたいと考え、昭和40年の4月30日に竹田津実氏(獣医師、会員)が涛沸湖で数百羽のオオハクの渡去を観察したと同時に、能取岬で待機していたのであるが、オオハクは岬の尖端を通らずに、約1km離れた岬の基部を通過して、当てがはずれたことがある。このことは、春秋の渡りのコースが異なると言うより、むしろ巾がある。線ではない、ということを示しているのではないだろうか。(なおこのことについては後にふれる)。

また、秋から冬にかけての渡り時期に、石狩川流域での渡りの目撃は、前述の村田氏のみである。石狩川流域は広い水田地帯で、加うるに多雪地帯であるので、農作業の終わった11、12月には目撃のチャンスは少なくなる。更に福原での南下観察時は表IVに見るように夜になるものが四分の一もあり、石狩川流域を通る時刻も夜で、人の気がつかないうちに渡っているものも多いといえよう。ちなみに、福原、ウトナイ間は上述のジグザグコースを通ったとすると、約160kmである。

ハクチョウはいつごろから渡りをしていたのであろうか。ロジャー・ピーターソン(邦訳、鳥類、昭44)は次ぎのように述べている。今地球上を飛んでいる鳥は千三百万年前から二百万年前にかけての鮮新世に現われた。そして渡りは百万年前から二百万年前の洪積世(注、氷河期)のような最近に行ったものでなく、ずっと昔から、長いあいだにわたって進められてきたものにちがいない、と殆どの鳥類学者は考えている。

ハクチョウ類の渡りルートはどうして決まったのだろうか。I. F. ザヤンチコフスキ(邦訳、面白い動物行動学、昭48)は、水鳥の渡りの専門学者達は渡りルートはかつて存在した海岸線であることを確かめている。これらの海岸で彼らは休息し、餌をとっているのである。そして先祖の渡りの道だけはそのまま受け継がれたというわけだ。だから、しばしば砂漠の上空を渡っても驚くにはあたらない。かれらはかつての海の上を飛んでいるのに過ぎないのだから、と述べている。

ところで天塩川・石狩川流域は氷河期以前はどんな状態であったのだろうか。湊正雄北大教授・井尻正二氏(昭41、日本列島)は、天塩、石狩川流域を含めて北海道中軸地帯の新第三紀、中新世中期(千六百五十万年前)の眺めについて、日高山脈は完全に北海道を二分する山脈であった。日高山脈の麓まで海が侵入してきて、太古のオホーツク海に日高の島が浮かび、その西側に神居古潭の緑色の暗礁が白波をかみ、はるか

かなたに大陸がかすんでいる。という風景もみられたわけである。と述べ、更に新第三紀の後半から第四紀にかけて、日高山脈は隆起の過程をとる、と述べている。新第三紀、鮮新世(六百万年前から二百万年前)の古地理図(湊教授監修、目で見ると日本列島の生いたち、による)は図4のとおりであるが、この頃、佐久、福原、砂川、浦臼などが、そして小川原湖も海岸線上に現れている。渡りルートはかつて存在した海岸線であるとするピーターソンのいう「氷河期よりずっと昔」という昔に、この頃が含まれるのではないだろうか。苫小牧、札幌地方を結ぶ、いわゆる苫小牧・札幌低地帯は図4によると海峡であり、その後この海峡は狭くなり、ウルム氷期(六万年前から一万年まで)の一時期に支笏火山群の噴出物によって、おおわれたことがあるが、沖積期(一万年前から現在まで)の当初は石狩湾は深く湾入し、千歳付近から苫小牧にかけてはせまい海湾であったらしいと、湊教授(昭45)は述べており、この海湾が後にウトナイ湖になるのであり、ここもハクチョウの渡りのルートであって不思議はないわけである。そしてこの海峡の東側は日高造山作用に伴う断層をマグマが貫通してできた夕張山脈であるから、日高山脈の高まりと広がりにつれて現われてきた海岸線上を、ハクチョウの先祖達が渡っていたということができ、何百万年かを経た今も子孫がこの道を受けついでいるわけである。

渡りルートが線でなく、巾があるという問題であるが、図4の六百万年前から二百万年の四百万年の間で、この間、当然これと全く同じであったとはいえないし、造山作用で当然、海岸線の移動もあっただろうし、従って渡りルートも移動、すなわち巾があるのであろう。

当時、図4によると北海道の渡島地方と本州は陸続きであり、海岸線沿いに、小川原湖へ渡って行けたと考えられ、前述のように、下北半島へのルートのあることを推定したが、このこともルートの存在を裏付けするもと考えるものである。

むすび

コハクを主とするハクチョウ類が、道北のクッチャロ湖、天塩川流域、道央の石狩川流域、ウトナイ湖、いくなれば北海道縦断のコースを春秋に通ると、報道、記録、観察、文献などに基づいて、また、ハクチョウの渡りのルートは昔の海岸線であるという説から、この地域の古地理図上に、上述のハクチョウの視認、観

察地を求め、推論したわけであるが、今後はウトナイ湖おける春秋(むしろ春冬)の渡りを、特に後者の確認と、またルート上における観察点を密にし、渡りの連続的な観察を積み重ね、まだ仮説の域を脱しきれないこの渡りルートの確定に努力し、更めて現在観察中の北海道のオオハクの渡りルートなどと共に報告する考えであり、更に渡りのルートの確定は、渡りの中継基地である湖沼の自然保護の問題にもつながるので、標識調査なども併用し、早急に行なわなければならないと考えるので、読者諸氏の御教示、御協力、御批判を切望する次第である。

終りに、御連絡下さった藤田、佐瀬、鈴木、村田の諸氏、ウトナイ湖の観察記録について御教示下さった伊賀、木下、藤巻の諸氏、このルートでの渡りの目撃者への報告依頼の記事掲載を御快諾下さった北海道新聞社社会部の五十嵐氏、コハクの写真の御貸与、御連絡、読者への協力の呼びかけなどをして下さった道北日報社の藪中氏、渡りルートなどについていろいろ御教示下さった堀内氏、大森氏、和田干造氏(青森県野鳥の会顧問)、三上士郎氏(日本野鳥の会青森県支部長、会員)、地質学的な問題について御教示を下さった湊教授に深甚なる謝意を表す。

なお、参考文献は省略し、文中の読み方の難しい北海道の地名に仮名をふり、読者の便宜に供する。

稚内(ワッカナイ)、浜頓別(ハマトンベツ)、幌延(ホロノベ)、仁達内(ニタチナイ)、確信内(オノップナイ)、天塩(テシオ)、佐久(サク)、音威子府(オトイネップ)、名寄(ナヨロ)、風連(フウレン)、忠烈布(チュウレップ)、朱鞠内(シュマリナイ)、多寄(タヨロ)、士別(シベツ)、剣淵(ケンブチ)、和寒(ワッサム)、雨竜(ウリュウ)、江丹別(エタンベツ)、神居古潭(カムイコタン)、北竜(ホクリュウ)、浦臼(ウラウス)、幌達布(ホロタップ)、胆振(イブリ)、有珠(ウス)、根釧原野(コンセンゲンヤ)、能取(ノトロ)、青森県の尾駁(オブチ)、苫小牧(トマコマイ)

(編集者注：藪中氏の写真は、この論文が掲載された野鳥誌の口絵にあり、この論文中にはない。個体数や距離などの数字は、アラビア数字に変えてある。なお、この論文の転載に当たっては、著者、著者が故人の場合は遺族の方の了解をいただいている。)